山田西地区遺跡分布調査概要報告書

１９９０年１１月

駒ヶ根市教育委員会

例　　言

1．本書は、駒ヶ根市東伊那山田地区に所在する「ふるさとの丘」予定地における遺跡分布確認調査の概要報告書である。調査の名称は調査対象地区が山田遺跡の西側に当ることから「山田西地区遺跡分布調査」とした。

2．調査は市補助金により駒ヶ根市教育委員会が中心となり駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。

3．調査区は考古館予定地に第Ⅰ調査区を、ふれあい学習広場予定地に第Ⅱ調査区を設定した。

4．分布調査の中でグリッド設定時の測量は友野良一・北澤武志が、グリッドの層位断面実測は北沢雄喜が行い、その他の実測・写真撮影は北澤(武)が行った。

5．遺物の整理、本報告書の作成は北澤(武)が行い、友野良一が監修した。

6．調査に伴う遺物、実測図等の関係資料は駒ヶ根市立博物館に保管してある。

7．出土石器は全点を図示してあるが、土器は特徴のあるもののみにとどめてある。

目　　次

例　　言
目　　次
第Ⅰ章　分布調査の経緯 …… 1
　第1節　分布調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査会の組織 …… 1
　第3節　分布調査の経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 3
　第1節　位置及び地形・地質 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　分布調査概要 …… 8
　第1節　調査概要 …… 8
　第2節　グリッド内の層位 …… 8
　第3節　出土遺物 …… 9
第Ⅳ章　総括 …… 10

図版目次

第1図　調査区の位置 …… 5
第2図　調査区の位置と周辺の地形 …… 6
第3図　周辺の遺跡分布図 …… 7
第4図　第Ⅰ調査区グリッド設定図および遺物の分布状況 …… 11
第5図　第Ⅱ調査区グリッド設定図および遺物の分布状況 …… 12
第6図　グリッド断面土層図1 …… 13
第7図　グリッド断面土層図2 …… 14
第8図　グリッド断面土層図3 …… 15
第9図　グリッド断面土層図4 …… 16
第10図　グリッド出土土器実測図 …… 17
第11図　グリッド出土石器実測図1 …… 18
第12図　グリッド出土石器実測図2 …… 19
第13図　グリッド出土石器実測図3 …… 20

分布調査グリッド一覧表 …… 21

写真目次

写真1　調査区遠景
写真2　調査区調査前状況
写真2～12　グリッド断面の状況
写真13　オ2グリッド流路、磨製石鏃出土状況、第Ⅱ調査区調査風景
写真14　グリッド出土土器
写真15～17　グリッド出土石器

第Ⅰ章　分布調査の経緯

第１節　分布調査に至るまでの経過

駒ヶ根市アルプスコミュニケーションシティー構想の一環として、「ふるさとの丘」を東伊那伊那耕地山田地区に建設することが決まり、平成２年度事業として予定地の内、仮称「考古館」、「ふれあい学習広場」の造成工事が行われることとなった。

工事予定地は、遺跡分布図の遺跡地外であったが、平成２年９月５日に県教育委員会文化課と現地にて協議をし、遺跡分布の確認のための調査を行うこととなった。

調査は駒ヶ根市が事業主体となり、平成２年10月５日付で駒ヶ根市発掘調査会との間に委託契約を締結、調査団を編成し、団長には友野良一氏をお願いして同年10月７日より11月７日まで現地での調査を行った。

第２節　調査会の組織（駒ヶ根市発掘調査会）

顧問　小平　善信　（駒ヶ根市文化財保存会会長）
　　中村　敬及　（駒ヶ根市教育委員長）
会長　高坂　　保　（駒ヶ根市教育長）
理事　友野　良一　（駒ヶ根市文化財審議委員会会長）
　　松村　義也　（　　〃　　副会長）
　　竹村　　進　（　　〃　　委員）
　　林　　起　（　　〃　　委員）
　　吉江　修深　（　　〃　　委員）
　　荒井　徳博　（　　〃　　委員）
　　福沢　　亘　（教育次長）
　　下村　幸雄　（博物館長）
監事　宮脇　昌三　（駒ヶ根市郷土研究会会長）
　　下平　基雄　（駒ヶ根市収入役）
幹事　気賀沢喜則　（駒ヶ根市教育委員会社会教育係長）
　　滝沢　修身　（　　〃　　社会教育係）
　　北澤　武志　（駒ヶ根市立博物館）
　　白沢　由美　（　　〃　　）

山田西地区遺跡分布調査団

（事務所　駒ヶ根市上穂栄町２３番１号　駒ヶ根市立博物館内）

団　　長　友野　良一　（日本考古学協会会員）
調査主任　北澤　武志　（駒ヶ根市立博物館）
調査員　北沢　雄喜　（上伊那考古学会会員）
　〃　　小町谷　元　（　　〃　　）
作業員　市村国忠、林吉十、渋谷鉄雄、小林満寿子、細田律恵、竹村章子
協力者　木下平八郎、小田切守正

〈敬称略　順不同〉

第３節　分布調査の経過

10月 7日(日)　雨の中、Ⅰ区測量を行う。１、３、５、A、C、E、G列の主杭設定。
10月 8日(月)　グリッド杭打ち(１～５、A～G列内)
10月 9日(火)　７、Ⅰ列の主杭設定。残りグリッドの設定。
10月11日(木)　Ⅰ区グリッド内表土の除土及び抜根が宮田村の小田切氏の指導によって行われる。Ⅱ区グリッドの設定。
10月14日(日)　機材運搬。テント設営場所の下草刈り。
10月15日(月)　午前中雨のため午後よりテント設営。Ⅰ区A１、A３、A５グリッドの掘り下げを開始する。石や木の根のため作業は困難である。
10月16日(火)　A１～５、B２～６、C１グリッド掘り下げ。C１北壁に沿って硬い土があり、１グリッド分北へ拡張しC′１グリッドとする。Ⅱ区表土の除土。層位確認のためG３グリッドの西にトレンチを掘るが地表より180㎝位の砂礫層より湧水。
10月17日(水)　Ⅰ区にベンチマークB.M.-①、B.M.-②を設定。C′１、C３～５、D２～６、E１グリッドの掘り下げ。地元の伊藤氏より聞き取り調査。
10月18日(木)　D４、E１～５、F２～F６、G５、H６グリッド掘り下げ。A１平面実測。
10月19日(金)　F２、G１～３、H２～４、I１～３グリッド掘り下げ。H４グリッドより弥生時代の磨製石鏃が出土。B列北壁、B４、D４、F４の東壁の断面実測を行う。C′１平面実測。
10月20日(土)　I５グリッド掘り下げ。本日までにⅠ区のグリッド掘り下げを完了する。D２北壁実測。A１～C５までグリッド内清掃。
10月22日(月)　Ⅰ区６列の断面実測。Ⅱ区３列、４列グリッドの掘り下げ。
10月23日(火)　Ⅰ区１列グリッド断面実測。Ⅱ区１列、２列グリッド掘り下げ。オ２グリッドの落ち込みは溝状となる。
10月24日(水)　Ⅰ区北よりグリッド内清掃。Ⅰ区A列、B列グリッドの写真撮影。Ⅱ区２列、３列及びイ列、オ列の北壁断面実測。本日までに全グリッドの掘り下げ、断面実測を完了したため作業員は本日までとし、テントを畳む。
10月27日(土)　必要な物を残し器材を整理する。
10月29日(月)　Ⅰ区C１～I３グリッドの写真撮影。
10月31日(水)　Ⅱ区ア２～キ２グリッド写真撮影。Ⅰ区I１、H４撮り直し。
11月 1日(木)　Ⅱ区カ３、キ４グリッド写真撮影。C′１平面実測。調査区内全体レベル測定（Ⅰ区１列、４列)
11月 2日(金)　Ⅰ区Ⅱ区全体レベル測定。遺物レベル測定。
11月 3日(土)　遺物位置平面実測。遺物取り上げ、A１～C３まで。
11月 4日(日)　遺物取り上げⅠ区C３～Ⅱ区キ４まで。
11月 7日(水)　D２、オ２実測
11月 8日(木)　Ⅱ区、地形測量時の杭F１、F２、G１、G２を平板実測で測定。本日で現場での調査を終了する。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　位置及び地形・地質

（第１図、写真１－１、２、３、第２図）

本調査区は駒ヶ根市東伊那の山田地区に所在する。ＪＲ飯田線太田切駅より東へ約４kmに位置し、標高は第Ⅰ調査区で668～672m、第Ⅱ調査区で677～680m、天竜川との比高は108～120mである。地形的には伊那山脈から流れ出て天竜川にそそぐ河川が天竜川左岸の河岸段丘上に形成する扇状地上に位置する。

両調査区の南には唐沢川、北に北川が流れ、西には井筋である「上井」の細い水路がある。

唐沢川から北は一旦緩やかな昇り傾斜となっており、第Ⅰ調査区の南側で土手となって下っている。この土手は人工のもので、以前に白土（Ｐｍ－Ⅰ）の採掘があり、採掘後に整地を行い土手をつくったとのことで、採掘前にはなだらかな下り傾斜であった。第Ⅰ調査区は谷筋にあたり、昭和26年の山田遺跡発掘調査の頃には湿地帯となっていたという。谷筋を下った所には溜池の「下堤」があり、すぐ南には富士塚がある。土地の人の話では、この谷筋を「こうろじくぼ」と呼んでいたとのことであるが定かではない。

第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区との間には丘陵が西へ向かって伸びており、「上井」の付近で露頭を見ることができる。露頭ではＰｍ－Ⅰが下部にかなりの厚さで堆積していた。また「上井」は現在コンクリートの水路となっているが、その工事の時に青い粘土が出たとの話もあった。

第Ⅱ調査区は緩やかに北へ向かって下る斜面となっており、浅い窪地の南の斜面である。

また第Ⅰ調査区より東へ約100mの位置に、昭和26年に行われた山田遺跡発掘調査のトレンチや、住居址の跡が窪みとなって残っている。

調査前の土地利用は、第Ⅰ調査区は栗と杜仲の林で、それ以前は畑作を行っていた時期もある。第Ⅱ調査区は牧草地として利用されてた。両調査区の間の丘陵から西側にかけては桑畑となっており、また調査区東側の林の中には以前に畑として開墾された平地を随所に見ることができる。

第２節　歴史的環境（第３図）

東伊那地区の河岸段丘上は、小河川が開析した丘陵状地形が発達するとともに各時代の遺跡が数多くあり、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」にも多くの遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は、大久保(１)、反目(４)、反目南(６)、殿村(10)、山田(13)、青木北(22)などが知られる。

弥生時代になると遺跡の数は増え、遊光(５)、反目南(６)、殿村(10)、狐くぼ(11)、丸山(12)、城村城(15)、善込(16)、栗林神社東(17)などがある。

古墳時代から平安時代にかけての遺跡は、反目(４)、遊光(５)、反目南(６)、殿村(10)、上塩田(18)などがある。また丸山に古墳があったとの言い伝えもあるが定かではない。

また天竜川左岸はその立地条件を生かした中世城館址が多いことで知られ、大久保城(２)、高田城(３)、稲村城(８)、遊光城(７)、稲村古城(９)、城村古城(14)、城村城(13)、塩田城(19)、青木城(20)、原城(23)、菅沼古城(24)があり、遊光遺跡では陸屋根式の住居址が発掘されている。

本調査区の西方にある山田遺跡については、以前に伊那村遺跡の一遺跡として発掘調査が

行われているので概略について触れてみたい。

天竜川によって形成された河岸段丘の第２段丘上には殿村遺跡があり、第３段丘上には狐くぼ遺跡が、さらに東に広がった丘陵地には丸山遺跡があり、山麓近くに山田遺跡がある。

以上の４遺跡は駒ヶ根市に合併する前の伊那村が昭和25年～26年にかけて発掘調査を行っており、総称して「伊那村遺跡」と呼称されていた。

昭和23～24年にかけては一帯の表面採集が行われ、昭和25年に宮坂英弐氏に指導を受け友野良一氏等により山田遺跡第１号住居址の発掘が行われた。さらに昭和26年には大場磐雄氏を調査委員長として伊那村遺跡の第一次調査が実施され、山田遺跡では住居址６軒、小竪穴址４基が発掘されたと報告がなされている。出土土器を概観すると他の時代のものも混ざってはいるが、縄文時代中期後葉の土器がほとんどを占めこの時期の住居址と思われる。

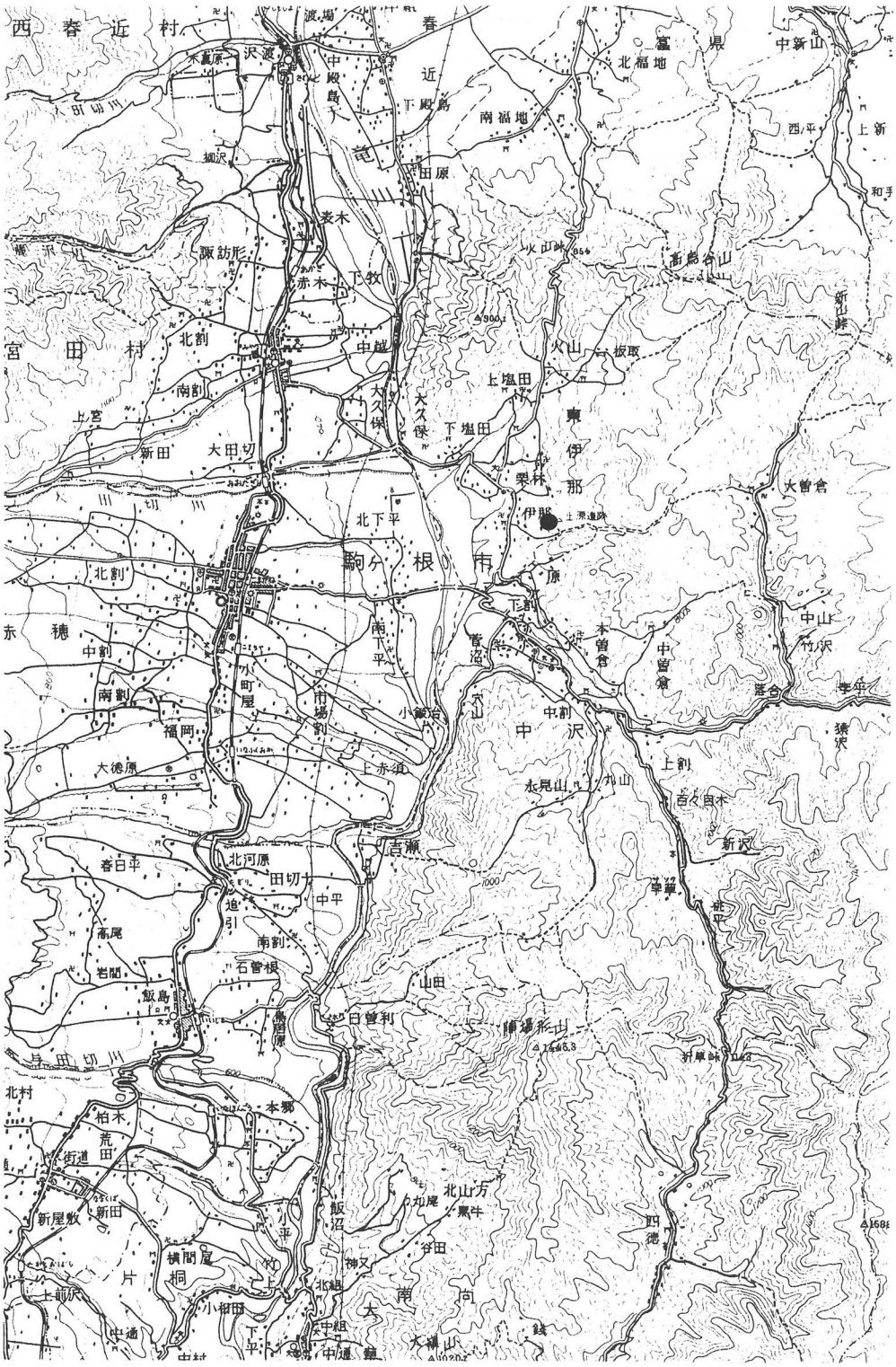
第１号住居址と第３号住居址は復元が実施され、遺跡のある一帯が上の原と呼ばれていることから地域の人に「上の原遺跡」と呼ばれて長年親しまれてきたが、破損のため昭和40年に取り壊され現在に至る。この度ふるさとの丘を建設するに当りこの住居址２軒の復元を行う予定がある。

【参考文献】

＊友野良一他
「長野県上伊那郡伊那村遺跡－第一次調査概報－」
『信濃』第三巻第六号　　１９５１年

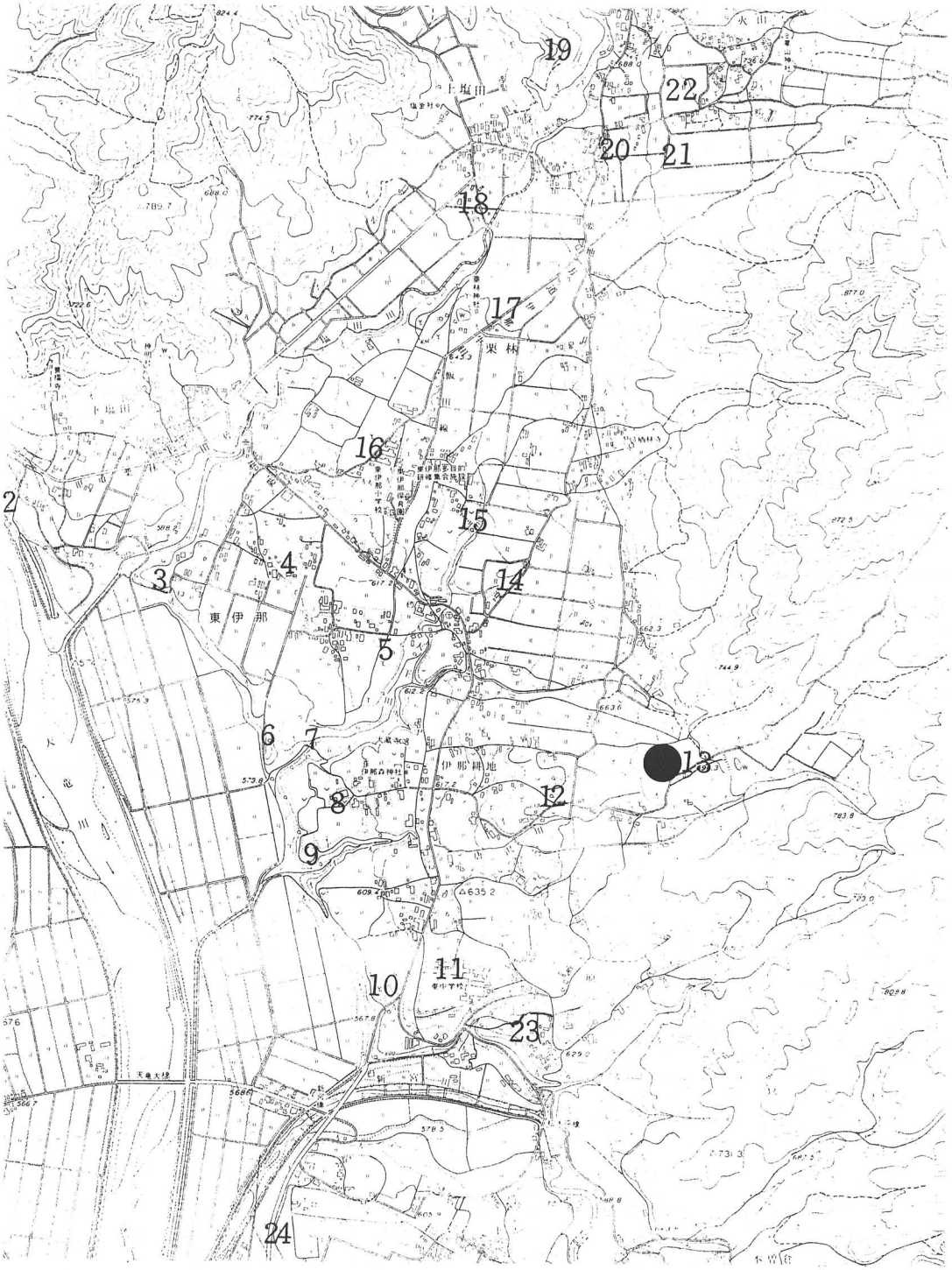
＊藤島亥治郎・友野良一
「長野県上伊那郡伊那村遺跡復元住宅の考察」
『信濃』第三巻第十一号　　１９５１年

＊友野良一他
「長野県上伊那郡伊那村遺跡第二次調査概報」
『信濃』第四巻第十一号　　１９５２年



第１図　調査区の位置(S=1:100,000)

第２図　調査区の位置と周辺の地形(S=1:1,000)



1　大久保　2　大久保城　3　高田城　4　反目　5　遊光　6　反目南　7　遊光城
8　稲村城　9　稲村古城　10　殿村　11　狐くぼ　12　丸山　13　山田　14　城村古城
15　城村城　16　善込　17　栗林神社東　18　上塩田　19　塩田城　20　青木城　21　青木
22　青木北　23　原城　24　菅沼古城

第３図　周辺の遺跡分布図(S=1:20,000)

第Ⅲ章　分布調査概要

第１節　調査概要（第２、４、５図）

調査区は「ふるさとの丘」の「ふれあい学習広場」予定地は斜面の上部の土を削り、下部に盛土をし造成するとの予定であるため予定地東半に第Ⅰ調査区を設定した。また「考古館」予定地には第Ⅱ調査区を設定した。その他の部分については切土が浅いとのことで調査は行わないこととなった。

「ふるさとの丘」の事前調査で地形測量がなされており、第Ⅰ調査区では地形測量時Ｅ６杭＝分布調査使用杭Ｃ３を基準として、地形測量時のメッシュに沿った設定を行った。

第Ⅱ調査区では畑の石垣を避けて任意の方位に設定し、後に地形測量時の杭を測量し位置の特定を行った。

また、標高は第Ⅱ調査区では地形測量時のＢＭ４＝677.126mを基準として使用し、第Ⅰ調査区ではＢＭ４から測量を行いＢ.Ｍ.－①＝665,200とＢ.Ｍ.－②＝663.800を設定し使用した。

グリッドは２×２ｍのものを100㎡中に２グリッドを設定し黄褐色テフラまで掘り下げた。

グリッド名は第Ⅰ調査区では南北方向に南からＡ～Ｉ、東西方向に西から１～６とし、第Ⅱ調査区では南北方向に南からア～キ、東西方向に西から１～４とした。

写真による記録は、平面、東壁、北壁の撮影を全グリッド行い、グリッドの断面は時間的制約から列を決め実測を行った。遺物は１／10で位置の測定をしレベルの測定を行った後、まとまって出土したものは一括して連番で取り上げた。

なおＣ１グリッドを調査中、北壁ぞいに堅い土が現れ、北側にグリッドを拡張しＣ′１グリッドとした。堅い部分は東西に30㎝幅の帯状となり新しい時期の畝と思われた。

第２節　グリッド内の層位
（第６、７、８、９図、写真２－３～１３－１）

第Ⅰ調査区では谷筋のため流れ込みの土石があり地層は複雑になっており、また畑地であったり、樹木が植えてあったりしたので攪乱もかなり受けている。

以下各層位の在り方について概略を述べると、まずⅠ層の耕土は西へ行くほど厚く堆積している。調査区の北側で丘陵の南斜面のＨ列、Ｉ列グリッドではⅤ層が耕土化したⅤ″層が表土となっている。

Ⅱ層は流れ込み土であり、調査区の南側でⅠ層の下部にあって比較的新しい時期の層位で、調査区南の土手を整地した後の土手面から流れ込んだものであろう。

Ⅲ、Ⅲ′層は腐蝕土で、同一の層位ととらえてもよく、調査区南東から同心円状に広がっていて、斜面下方の西へ行くほど厚く堆積しており下方の土はかなり締まっている。調査区東側のＢ６グリッドでは20㎝程の堆積だが、西側のＤ２グリッドでは50㎝程の厚さとなっている。Ⅳ層はⅤ′の上層に当る暗灰褐色土で、砂粒を含み水分を多く含み締まりはない土質で、10㎝前後の厚さで堆積している。

Ⅴ層は丘陵を覆っている新期テフラ上部の黄褐色土であり、攪乱も受けず石も少ない。丘陵の南斜面に位置するＨ列、Ｉ列グリッドにあらわれ、調査区東北では平坦な堆積であるのに対し、それより南西では凹凸が激しい。

Ⅴ′層は黄褐色土であるが黒色土による攪乱がかなりあり、黄褐色土自体も混土が見られ、

二次堆積土と思われる。この層の上部には１ｍ以下の石が数多くあり、石はＶ′層に埋まった状態や浮いた状態、攪乱の中に落ち込んだ状態で出ている。石は砂岩、花崗岩が多かった。

砂を含むⅣ層がＶ′層の上にあることから、この石も流れ込みによるものと思われる。

なおＧ３グリッドの西に層位を観察するためのトレンチを２ｍ程掘り、途中から湧水があったため詳細な観察は断念したが、地表より60㎝下に礫を含む黄褐色テフラ層が20～30㎝あり、その下は礫を含まない黄褐色テフラ層となっていた。さらにこのテフラ層の下部に砂礫層があり、この層から湧水があった。「上井」の工事の折に出た粘土層が不透水層となっていることが推測できる。

以上のことから、第Ⅰ調査区では現状より深い谷であった地形が、上部からや左右の丘陵からの土石の流入・堆積によって現在のような緩やかな谷地形となったものと思われる。

次に第Ⅱ調査区の層位では、まずⅠ層は調査前の牧草地の耕土である。Ⅱ層とⅣ層は漸移層である。Ⅲ層は黒褐色の腐触土で、調査区北側ではこの層は見られず流れてしまったものと思われる。Ⅲ′層はⅢ層とＶ層との間にあり両層の土が混ざっている層である。Ｖ層は黄褐色のテフラで、非常に脆い２～３㎝程の砂岩を多く含んでいる。調査区南寄りではⅢ層の落ち込みが顕著に見られ、木の根による攪乱が激しい。

オ２グリッドでは掘り下げると南東から北西へ向かう溝状の落ち込みとなり、底の土層にわずかに砂が混じっていることを確認した。他のグリッドでは現れずオ２グリッドのみであったが、緩やかな谷地形の底付近にあることや、下へ下るにしたがって幅が広くなることから自然流水路と思われる。

第３節　出土遺物

（第４、５、10、11、12、13図、グリッド一覧表、写真14～17）

グリッド内からの出土遺物は、第Ⅰ調査区では土器片が77点、陶器片が２点、石器類16点、炭化物２点であった。第Ⅱ調査区では土器片２点、石器２点の出土のみであった。なお土器片の接合例は無かった。

遺物の分布は第４、５図のとおりで、第Ⅰ調査区では東南部でもっとも密度が濃く同心円状に北西へ広がりを持ち、多くがＶ層より上層で出土している。この同心円状の分布は土層のⅢ、Ⅲ′層の広がりと一致している。また第Ⅱ調査区での４点の出土遺物は、いずれもⅢ′層からの出土である。

第10図に図示した土器片は、５を除きいずれも縄文時代中期後葉期のものである。

１は刻目を持つ隆帯下の胴部は渦巻文を配し、曲線をえがく沈線が地文となる。２の沈線による綾杉文も胴部の地文である。３は中期後葉初頭の梨久保Ｂ式に見ることができる細隆帯貼付による文様をもつ土器である。

４は偏平な隆帯を貼り付けた後その下部に刻み目を付けており、胎土はきめが細かい。５は沈線の区画内にＲＬの縄文を施したもので縄文時代後期の土器である。６は半截管施文具による縦の平行沈線を地文とする土器の胴部破片で中央は垂下帯である。口縁部が無文で円筒形に近い形で立ち上がる胴部をもつ曽利Ⅰ式の系統に近い土器である。７は口縁部破片で、口縁部区画に太い隆帯による連続入り組み文を施す深鉢で、区画内は縦の平行沈線文を充填している。８はＲＬの縄文を施す土器であるが、内面は凹凸が顕著で、胎土は石英、長石、雲母などを多く含む。９は細条線を胴部地文とする土器で、胎土は石英、長石、雲母などを多量に含む。10は口縁部に付くＸ字状把手の上部破片で、断面が三角形の粘土の両側に粘土紐を渦巻状に貼り付け、紐の間を棒状施文具でなぞって作られており、その他の部分は指頭による調整を行っている。胎土は0.1㎜程の長石等を含む。11も把手であり、両側に渦巻文

を配している。上部の渦巻は口縁部を巡っている沈線が両側から絡むものである。胎土は暗赤褐色で0.1㎜以下の砂粒を多く含みかなり脆い。

第11図の石器１～７は硬砂岩製の打製石斧で、５、６、７は大型の石斧である。この中で２、４、６、７は岩質が緻密で、６は多数の亀裂が走っている。

第12図の１の岩質は雲母を多量に含む比較的柔らかい砂岩で、２は多孔の硬砂岩である。

３は三箇所に分かれて出土しており、それぞれは約10㎝の距離を置いて散らばっていて、接合可能であった。粘板岩で上部に打痕らしき痕が見られるが使用痕はない。

第13図の１～３は硬砂岩の剥片石器である。４と５は礫から剥片を剥いだ残片と思われ、４は緑色岩で５は硬砂岩である。５は光沢のある平滑面をもち掻器的な使用も考えうる。６は硬砂岩製の磨石で片面に平滑な面がある。７は粘土板岩の河原石で、使用痕は無く錘石として使用されたものと思われる。８はＨ４グリッドから出土した弥生時代の磨製石鏃。粘板岩製で、凹基であるが脚の１方が欠損している。法量は長さ64㎜、幅27㎜、基部長10㎜、厚さ４㎜、重さ約７ｇである。本調査で弥生時代の遺物はこの磨製石鏃のみであるが、近辺の弥生時代の遺跡は調査区の西に丸山遺跡がある。

なお陶器２点は、Ｄ４グリッド出土の破片が江戸時代後期の灰釉碗で、Ｆ４グリッド出土のものが室町時代の美濃鉄釉甕の破片である。両者とも比較的上層で出土している。

炭化物はＤ２グリッドから杉の実を、Ｈ４グリッドの炭化物層から木の炭化物を採集したがいずれも最近のものであると思われる。

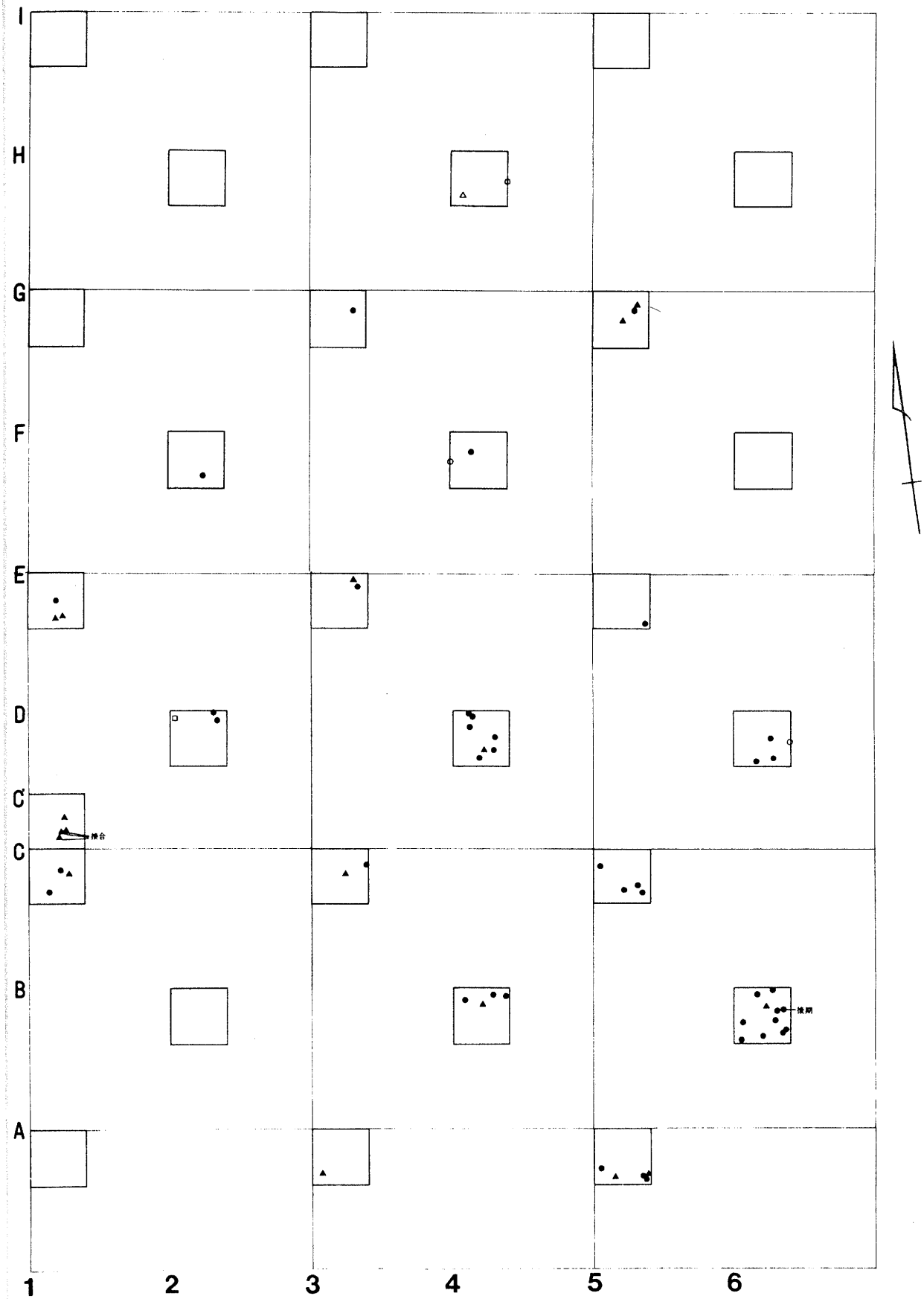
第Ⅳ章　総　　括

本調査において遺物の分布状態は、第Ⅰ調査区では谷地形の上方より下方への広がりを持ち、腐蝕土の堆積状態と一致する。またこの谷の上方には山田遺跡の発掘調査跡があり、縄文時代中期後葉の住居址が発掘されていて、調査区出土の遺物も同時期の土器がほとんどである。よって第Ⅰ調査区の出土遺物は山田遺跡から流入してきたもの考えることができる。

山田遺跡の住居址は７軒が発掘されているのみで、集落の広がりは確認されていないが、両調査区の上方の比較的平坦な斜面に広がりを持つことが予想できる。そして第Ⅱ調査区では文様の無い縄文土器片が２点と打製石斧が２点のみの出土であったが遺構はなく、これらの遺物も山田遺跡から流入したものと思われる。

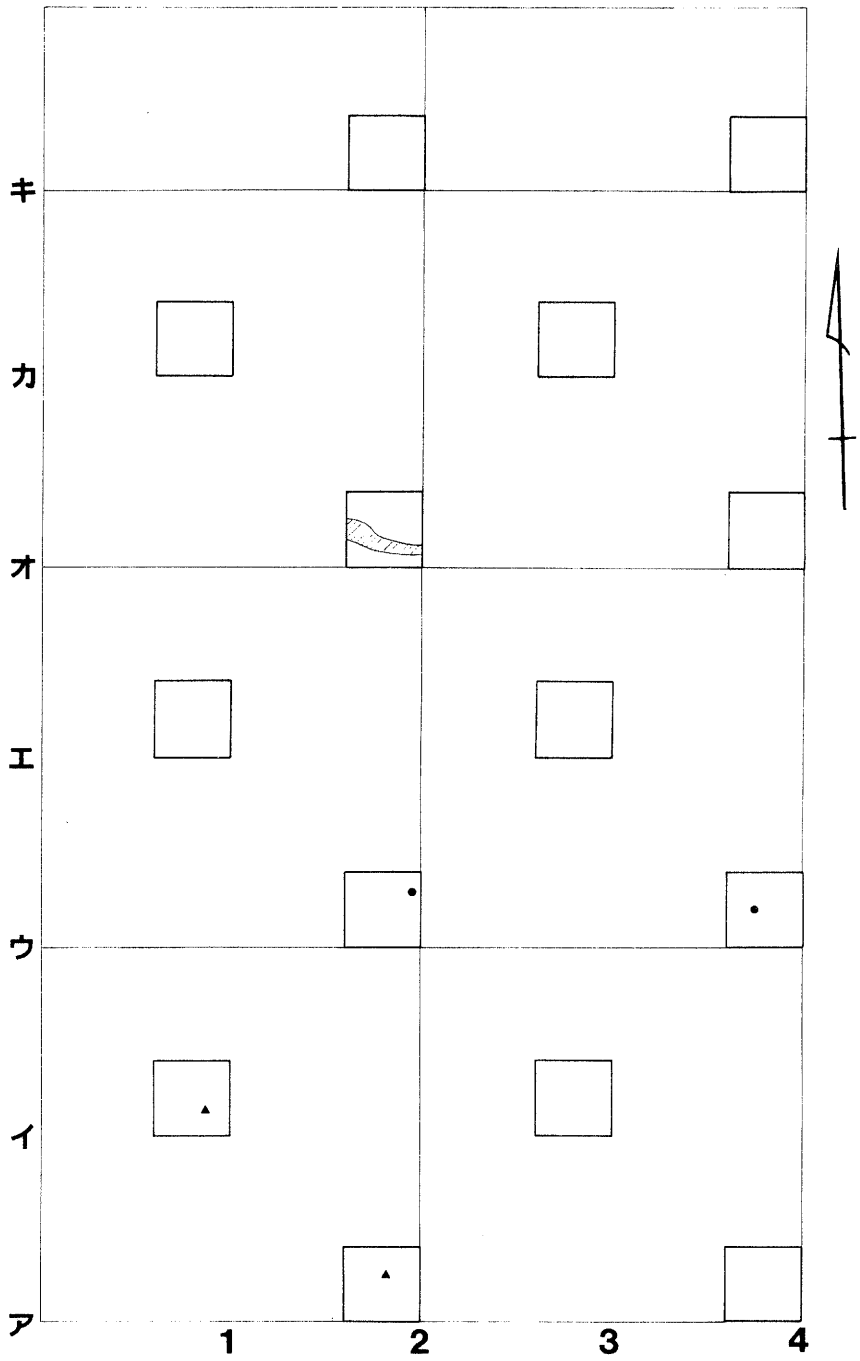
また第Ⅰ調査区において弥生時代の磨製石鏃が１点出土しているが、調査区の西に丸山遺跡が広がっており、関係が注目される。

以上、簡単であるがまとめとし概要報告とする。



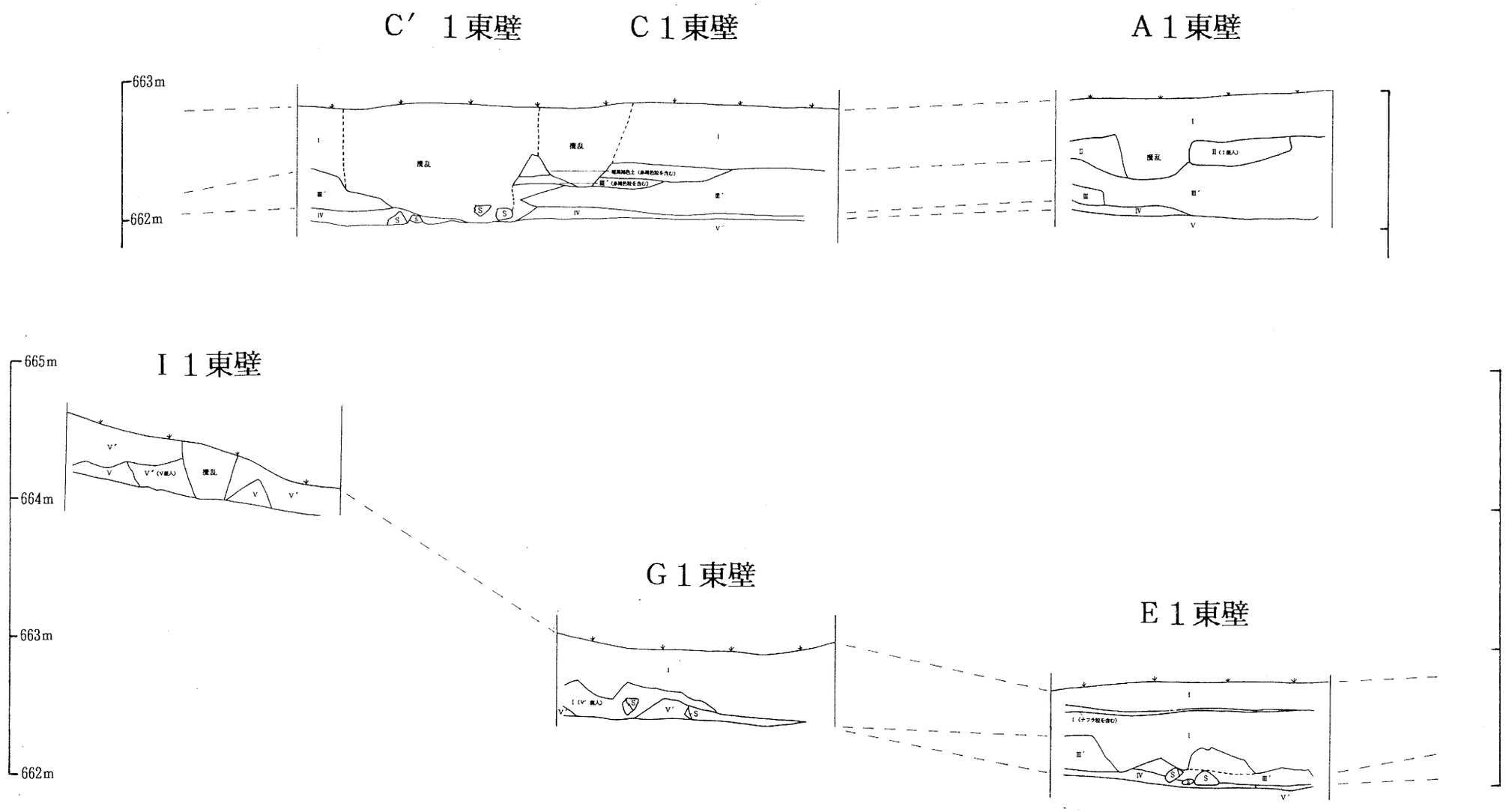
第４図　第Ｉ調査区グリッド設定図および遺物の分布状況(S=1:200)

●土器　▲石器　□炭化物
○陶器　△磨製石鏃



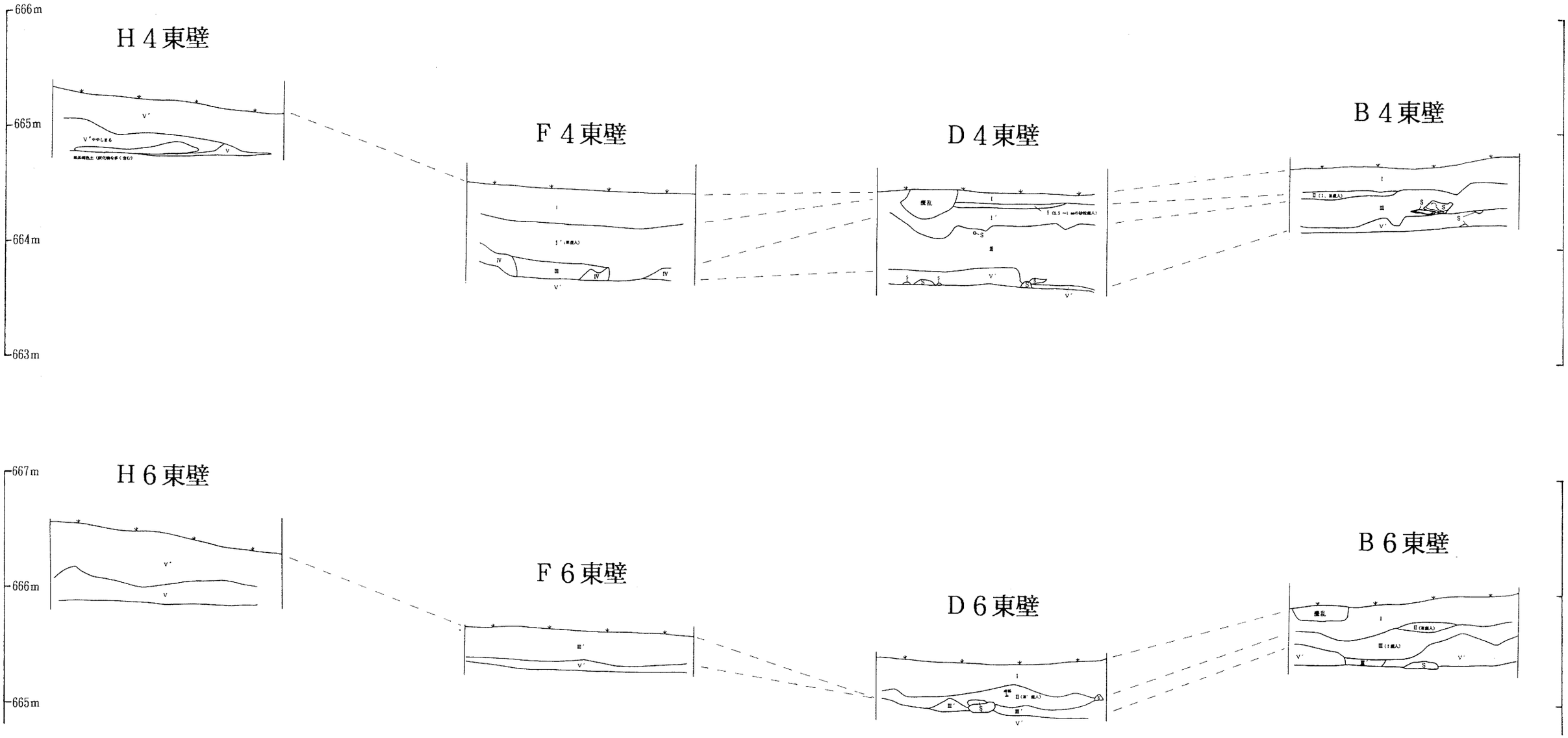
第５図　第Ⅱ調査区グリッド設定図および遺物の分布状況(S=1:200)

●土器　　▲石器



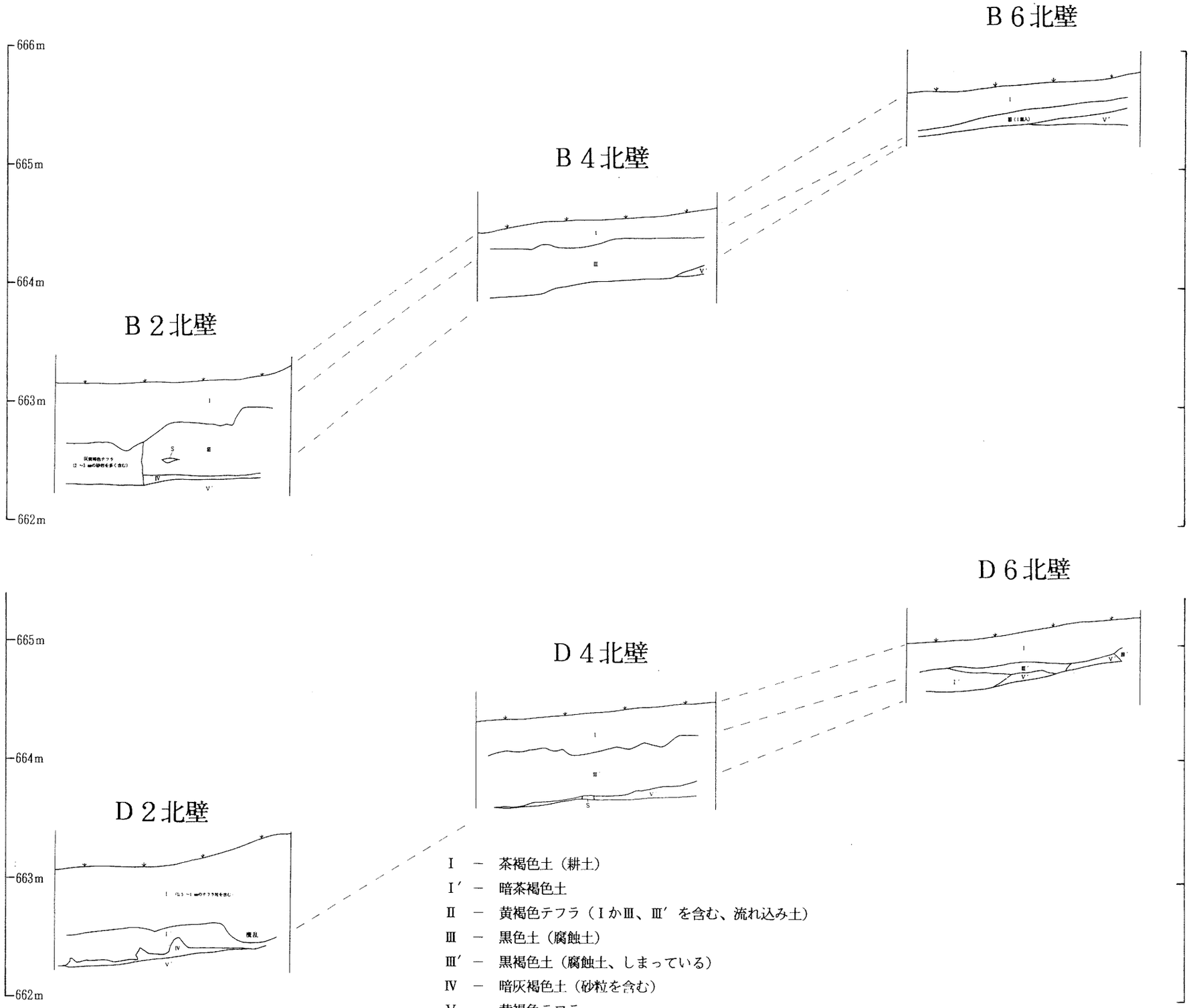
Ⅰ　－　茶褐色土（耕土）
Ⅰ′　－　暗茶褐色土
Ⅱ　－　黄褐色テフラ（ⅠかⅢ、Ⅲ′を含む、流れ込み土）
Ⅲ　－　黒色土（腐蝕土）
Ⅲ′　－　黒褐色土（腐蝕土、しまっている）
Ⅳ　－　暗灰褐色土（砂粒を含む）
Ⅴ　－　黄褐色テフラ
Ⅴ′　－　黄褐色テフラ（腐蝕土の攪乱が入る、多数の石を含む）
Ⅴ″　－　黄褐色テフラ（Ⅴより褐色がまさる）
S　－　石

第６図　グリッド断面土層図１
（グリッド内 S=1:40）

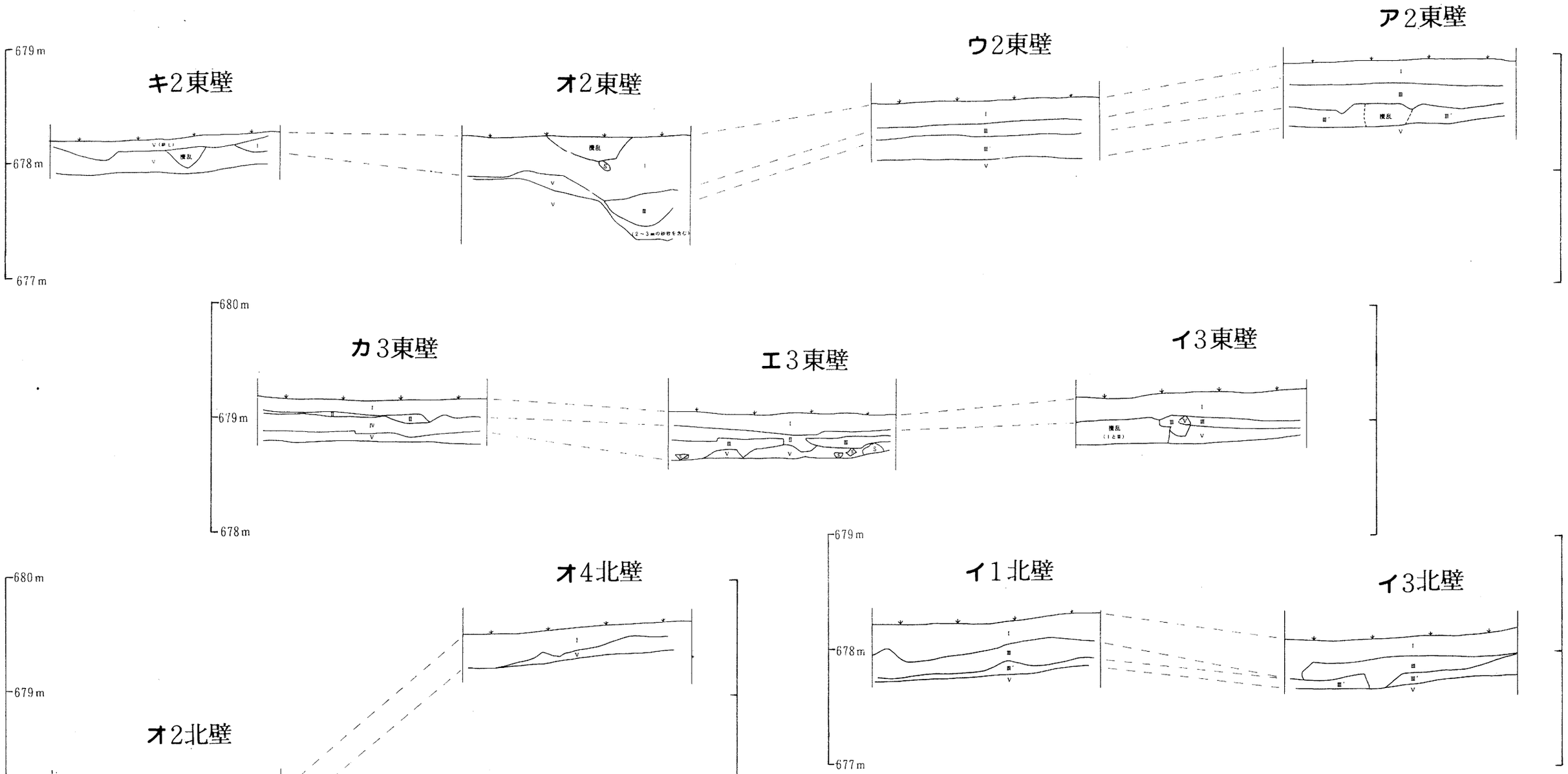


Ⅰ　－　茶褐色土（耕土）
Ⅰ′　－　暗茶褐色土
Ⅱ　－　黄褐色テフラ（ⅠかⅢ、Ⅲ′を含む、流れ込み土）
Ⅲ　－　黒色土（腐蝕土）
Ⅲ′　－　黒褐色土（腐蝕土、しまっている）
Ⅳ　－　暗灰褐色土（砂粒を含む）
Ⅴ　－　黄褐色テフラ
Ⅴ′　－　黄褐色テフラ（腐蝕土の攪乱が入る、多数の石を含む）
Ⅴ″　－　黄褐色テフラ（Ⅴより褐色がまさる）
Ｓ　－　石

第７図　グリッド断面土層図２
（グリッド内 S=1:40）

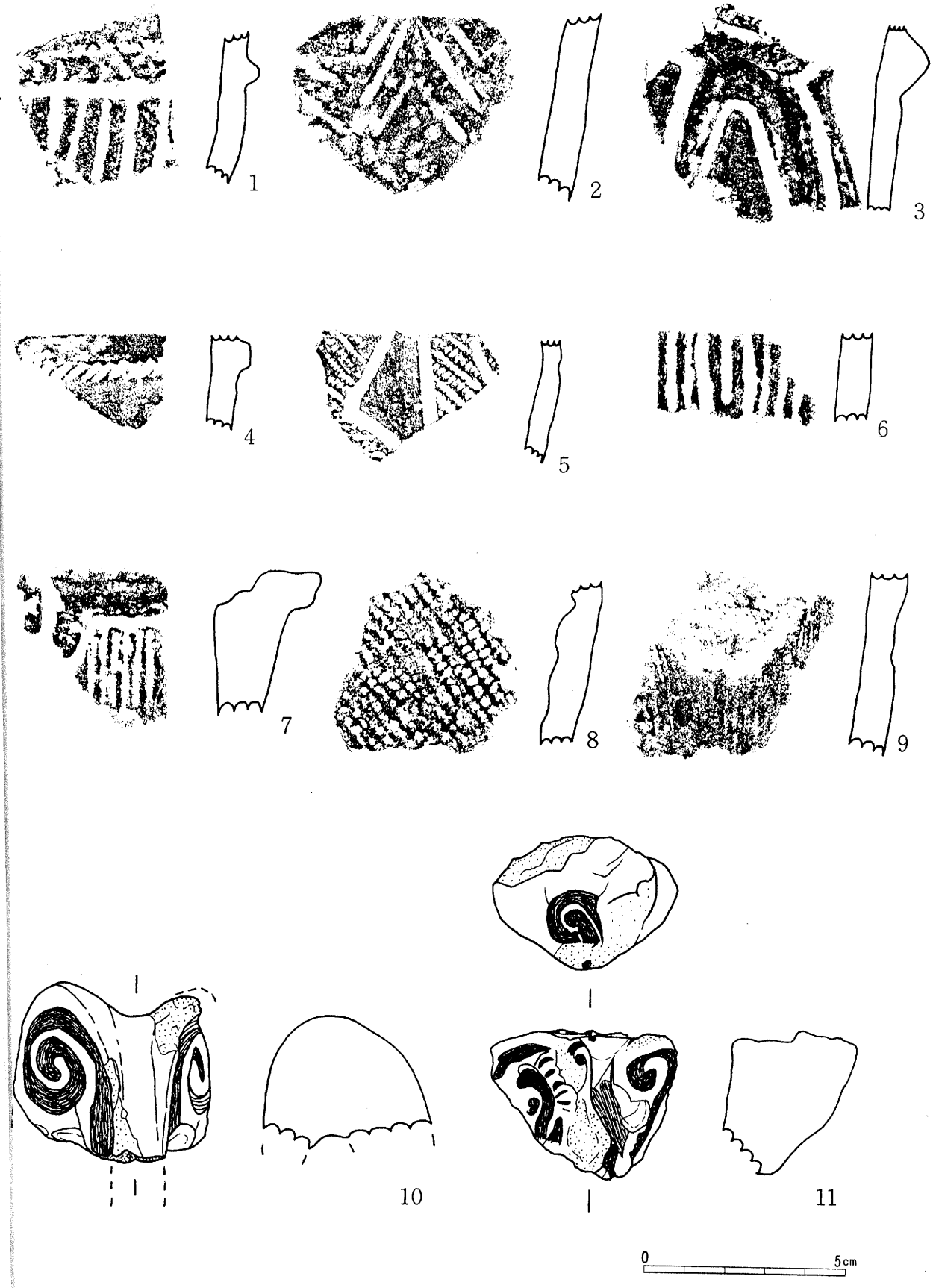


第８図　グリッド断面土層図３
（グリッド内 S=1:40）

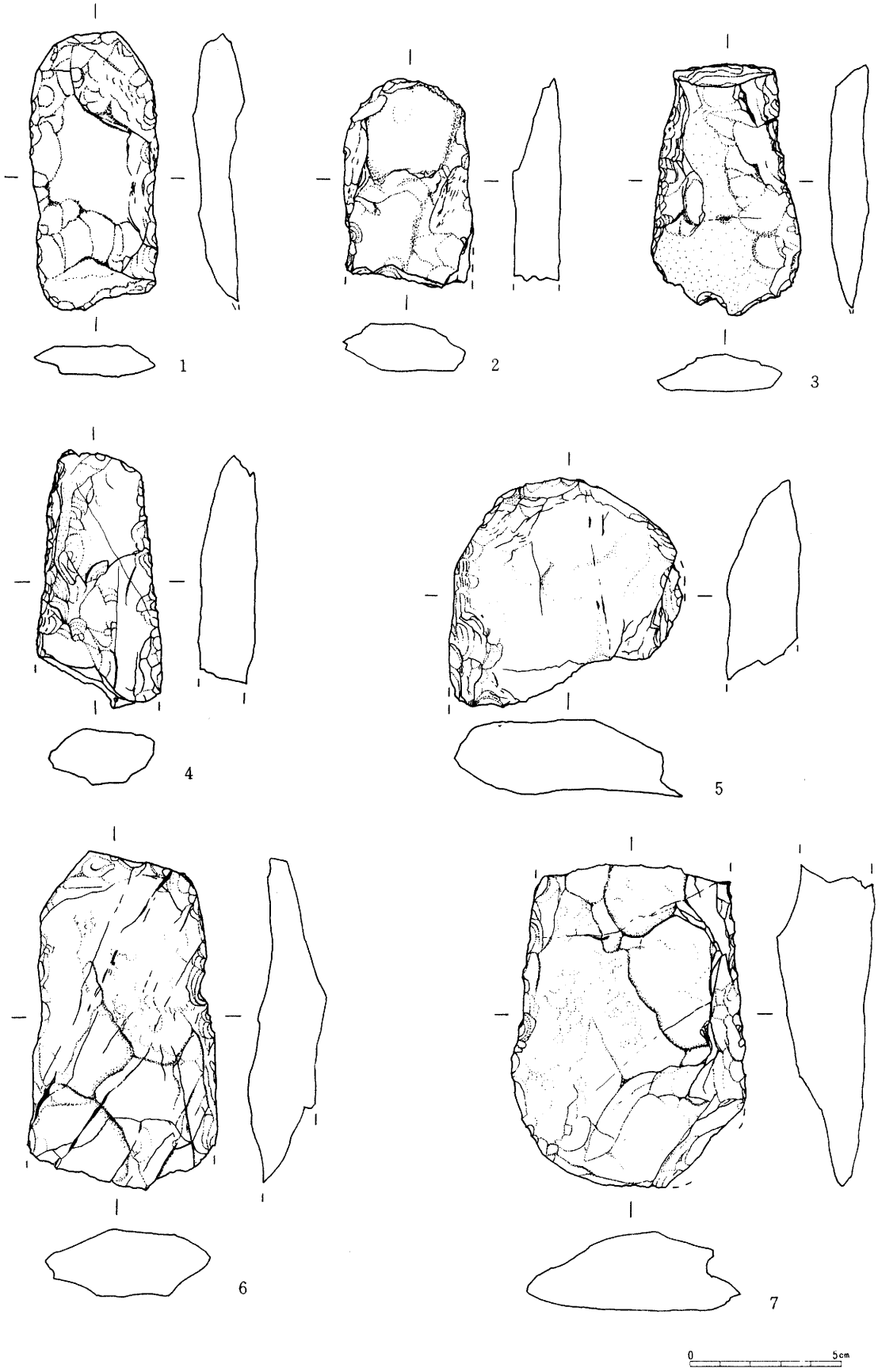


Ⅰ　－　茶褐色土（耕土）
Ⅱ　－　茶黄褐色土
Ⅲ　－　黒褐色土（腐蝕土）
Ⅲ′　－　Ⅲ・Ⅴが混在する層
Ⅳ　－　暗褐色土
Ⅴ　－　黄褐色土（テフラ、もろい砂岩を含む）
S　－　石

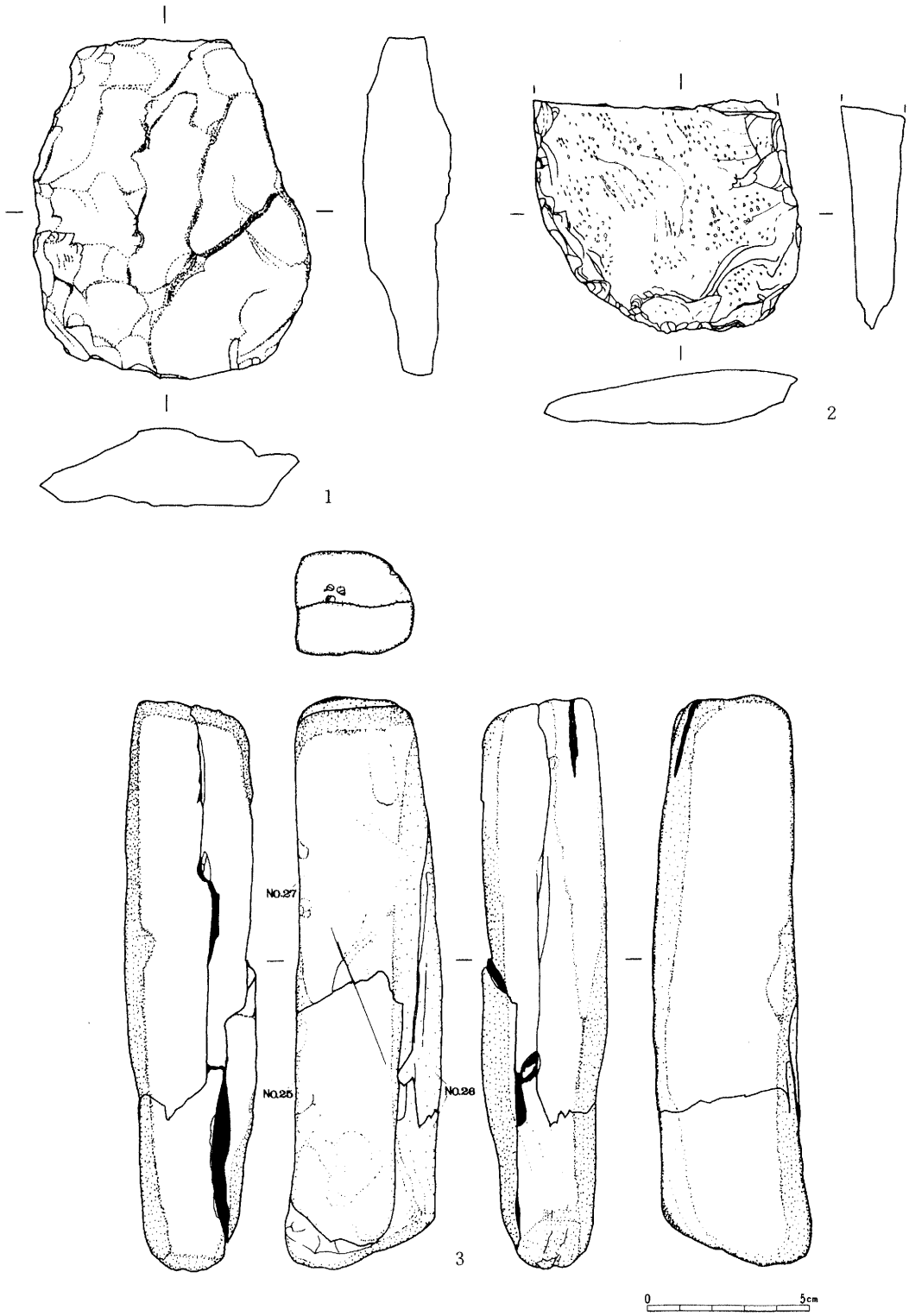
第９図　グリッド断面土層図４
（グリッド内 S=1:40）



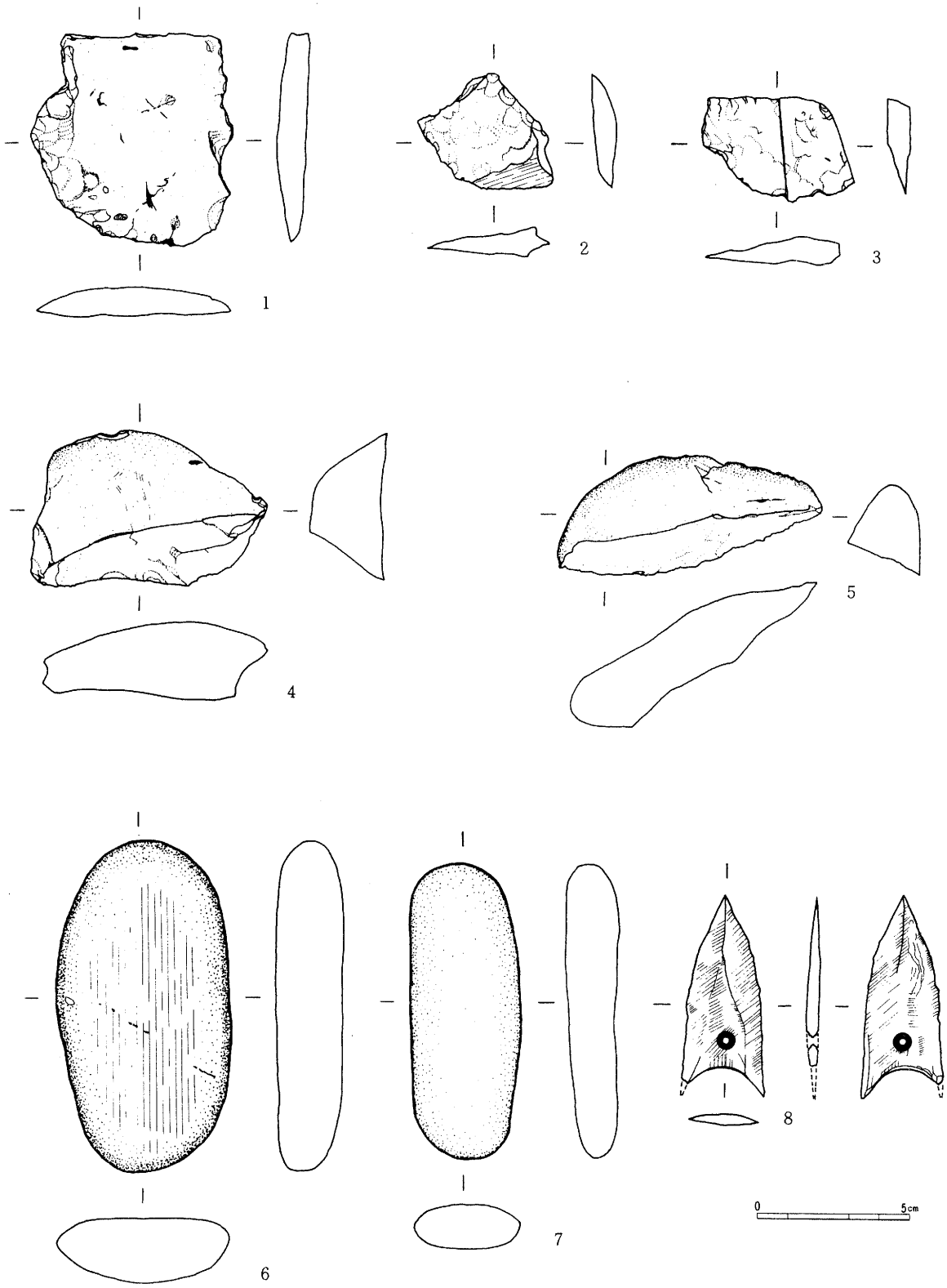
第10図　グリッド出土土器実測図



第11図　グリッド出土石器実測図１(S=1/2)



第12図　グリッド出土石器実測図２(S=1/2)

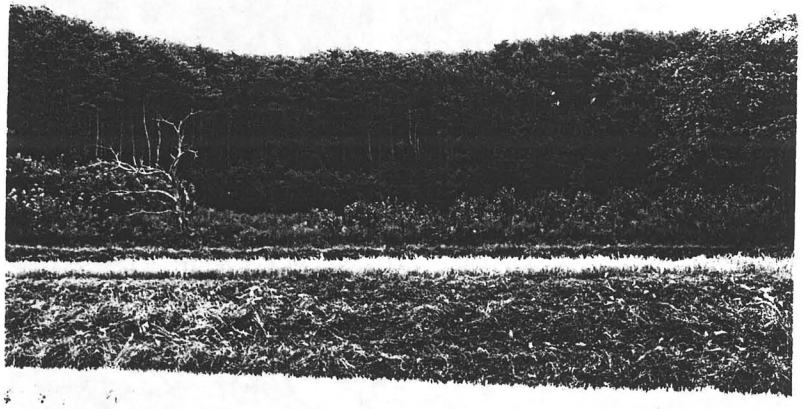


第13図　グリッド出土石器実測図３(S=1/2)

分布調査グリッド一覧表

グリッド名	基盤	断面実測	出土遺物、その他				
			土器	陶器	炭化物	石器	石器の種類、その他
第 A 1	V′ 層	東壁					
I A 3	〃					1	硬砂石斧
調 A 5	〃		4			2	硬砂石斧、硬砂石器
査 B 2	〃	北壁					
区 B 4	〃	東・北壁	4			1	硬砂石斧
B 6	〃	〃	12			1	硬砂剥片
C 1	〃	東壁	2			1	錘石
C′ 1	〃	〃				2	硬砂磨石、接合資料
C 3	〃		5			1	砂岩石斧
C 5	〃		14				
D 2	〃	北壁	2		1		
D 4	〃	東・北壁	10			1	硬砂剥片
D 6	〃	〃	10	1			
E 1	〃	東壁	2			2	石斧、緑色岩石器
E 3	〃		3			1	硬砂石斧
E 5	〃		4				
F 2	〃		2				
F 4	〃	東壁	1	1			
F 6	V層	〃					
G 1	V′ 層	〃					
G 3	V層		1				
G 5	〃		1			2	硬砂石斧、硬砂剥片
H 2	〃						
H 4	〃	東壁			1	1	磨製石鏃
H 6	〃	〃					
I 1	〃	〃					
I 3	〃						
I 5	〃						
第 ア 2	V層	東壁				1	硬砂石斧
II ア 4	〃						
調 イ 1	〃	北壁				1	硬砂石斧
査 イ 3	〃	東・北壁					
区 ウ 2	〃	東壁	1				
ウ 4	〃		1				
エ 1	〃						
エ 3	〃	東壁					
オ 2	〃	東・北壁					(溝)
オ 4	〃	北壁					
カ 1	〃						
カ 3	〃	東壁					
キ 2	〃	〃					
キ 4	〃						

1．分布調査区遠景　（天竜川対岸より）



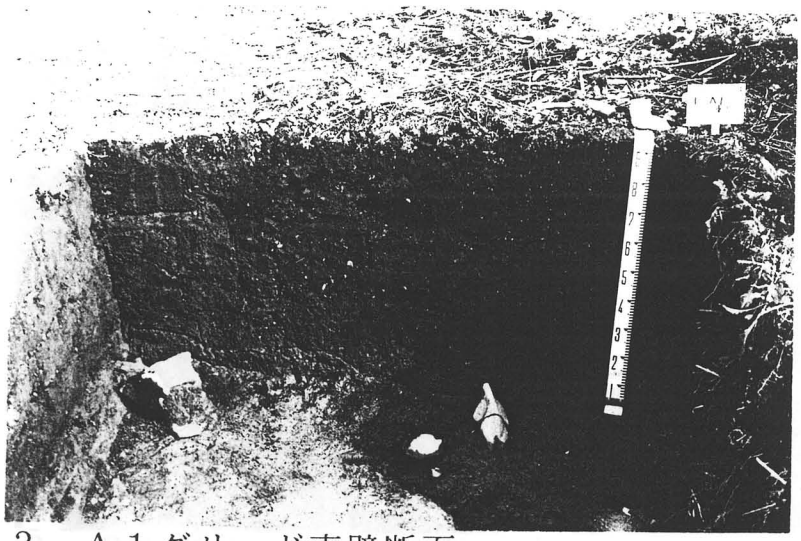
2．第Ⅰ調査区　西より

3．第Ⅱ調査区　西より

写真１

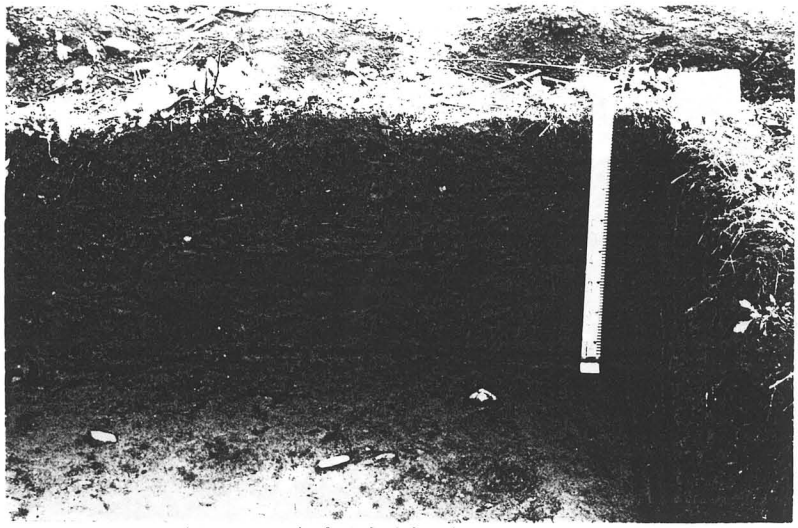
1．第Ⅰ調査区調査前状況

2．第Ⅱ調査区調査前状況

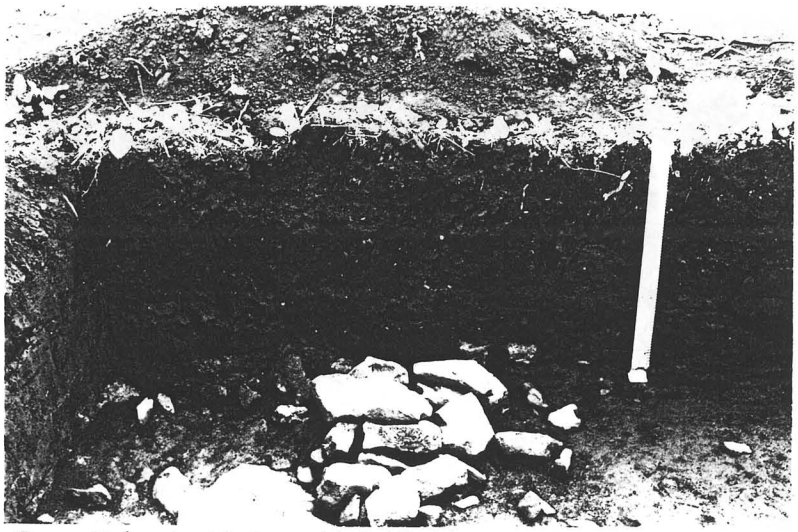


3．Ａ１グリッド東壁断面

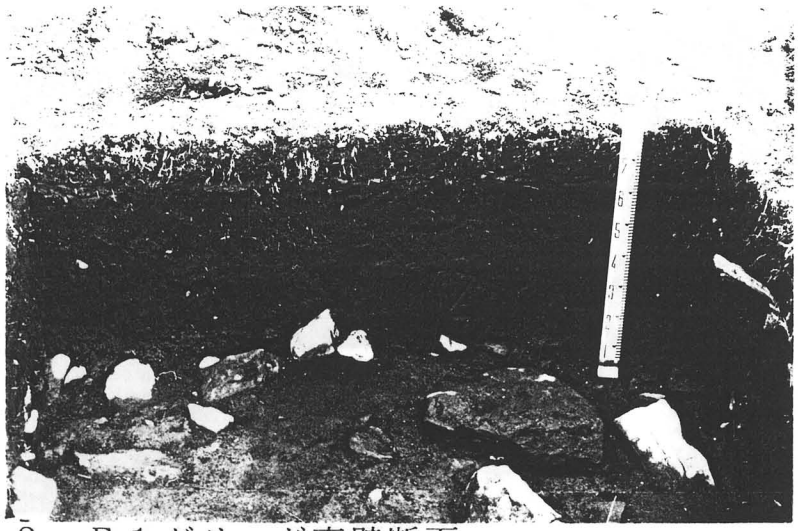
写真２



1．Ｃ１グリッド東壁断面

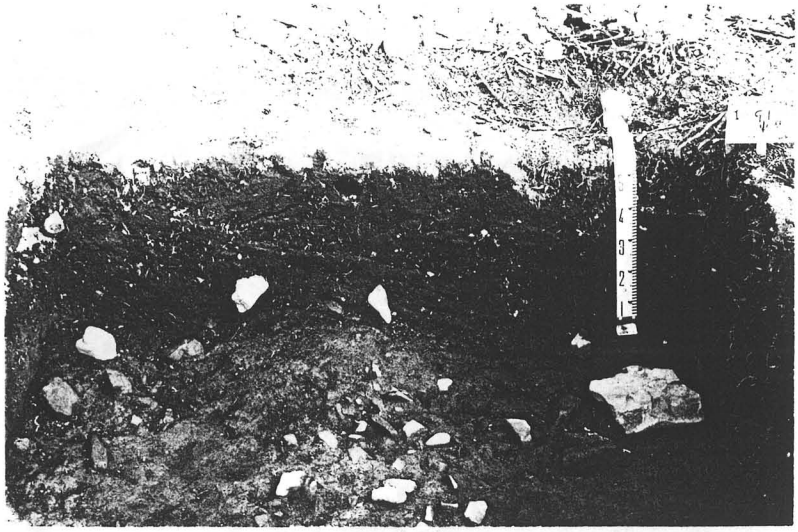


2．Ｃ′１グリッド東壁断面

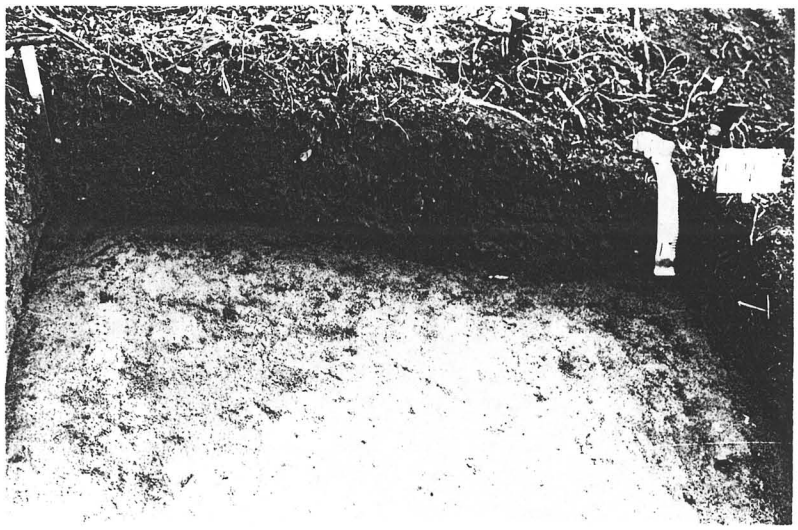


3．Ｅ１グリッド東壁断面

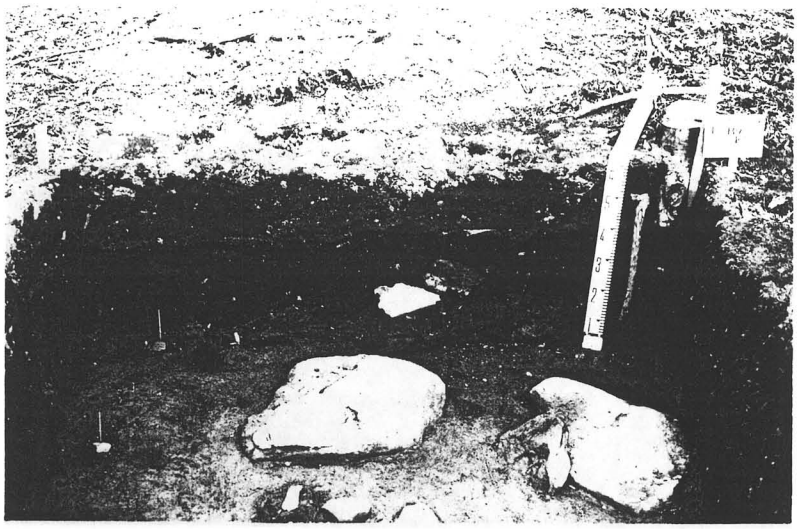
写真３



1．Ｇ１グリッド東壁断面



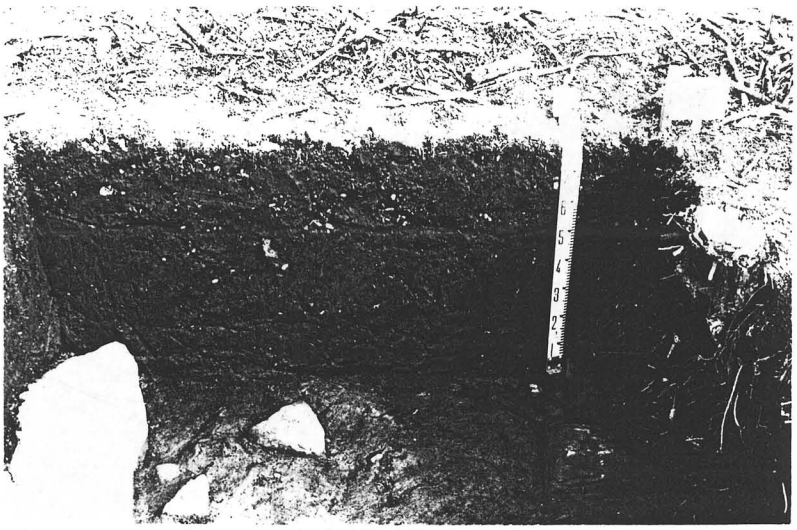
2．Ｉ１グリッド東壁断面



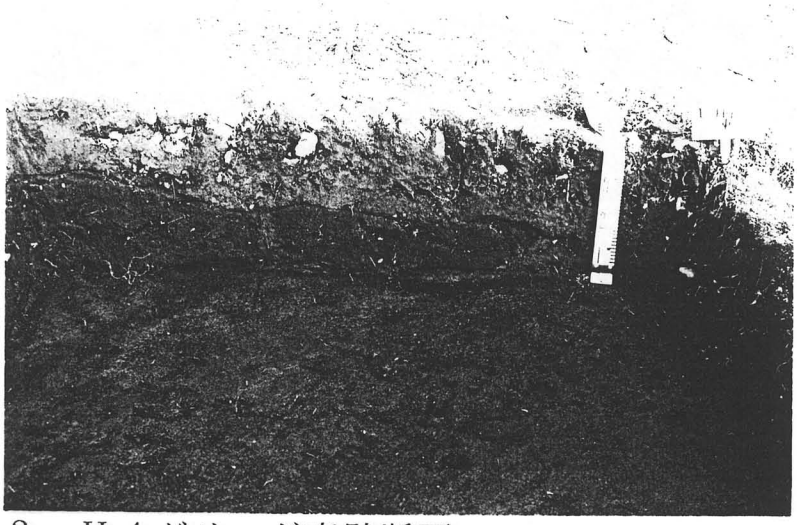
3．Ｂ４グリッド東壁断面

写真４

1．Ｄ４グリッド東壁断面

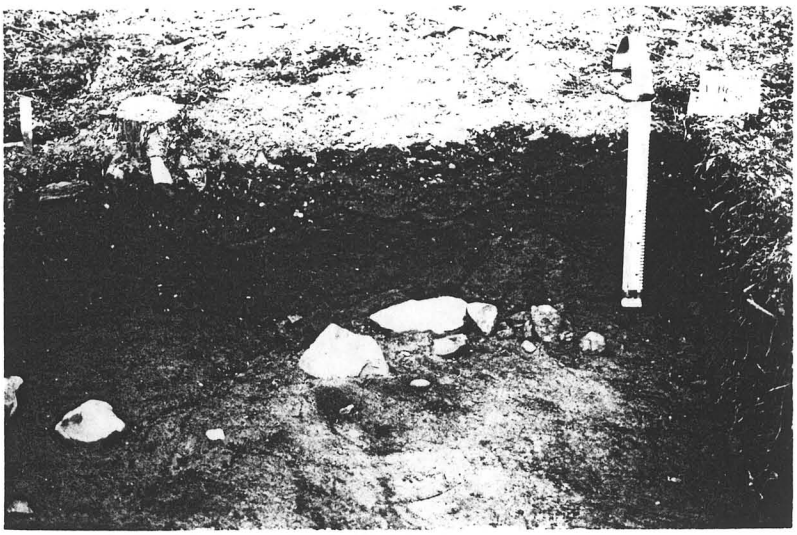


2．Ｆ４グリッド東壁断面



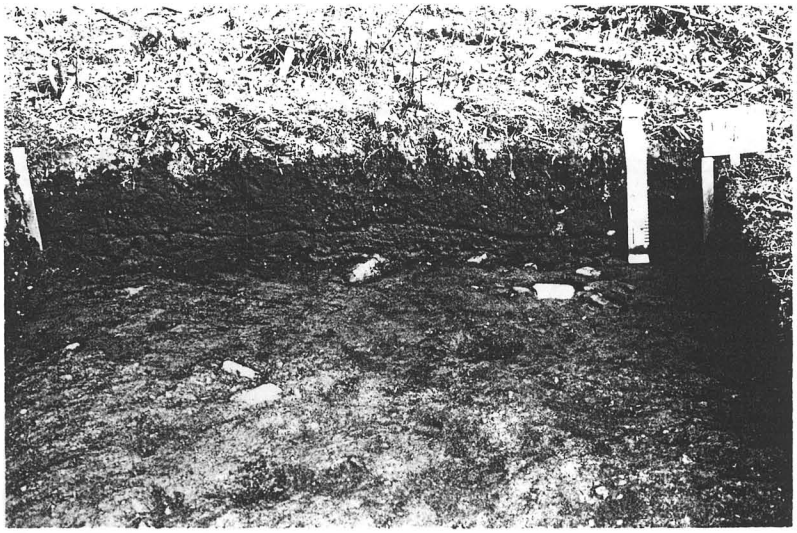
3．Ｈ４グリッド東壁断面

写真５



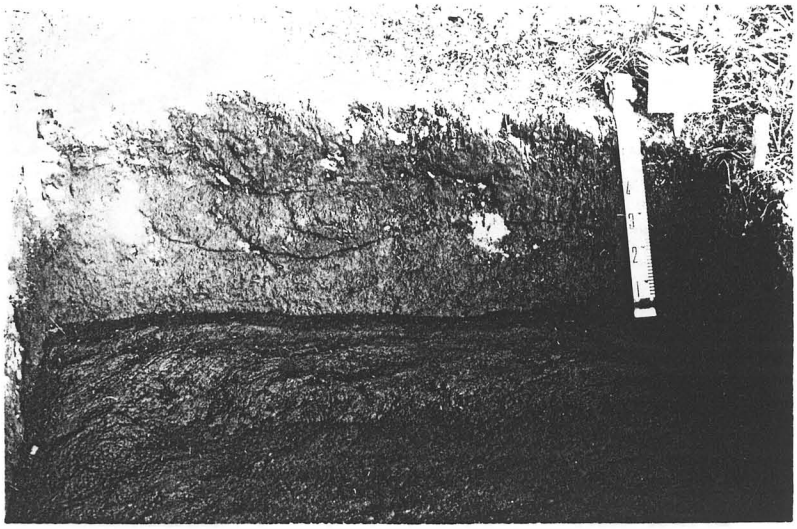
1．Ｂ６グリッド東壁断面

2．Ｄ６グリッド東壁断面

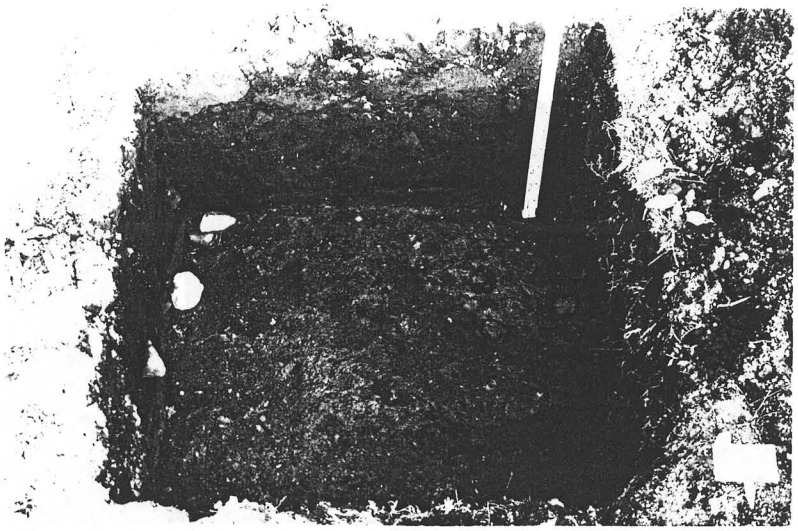


3．Ｆ６グリッド東壁断面

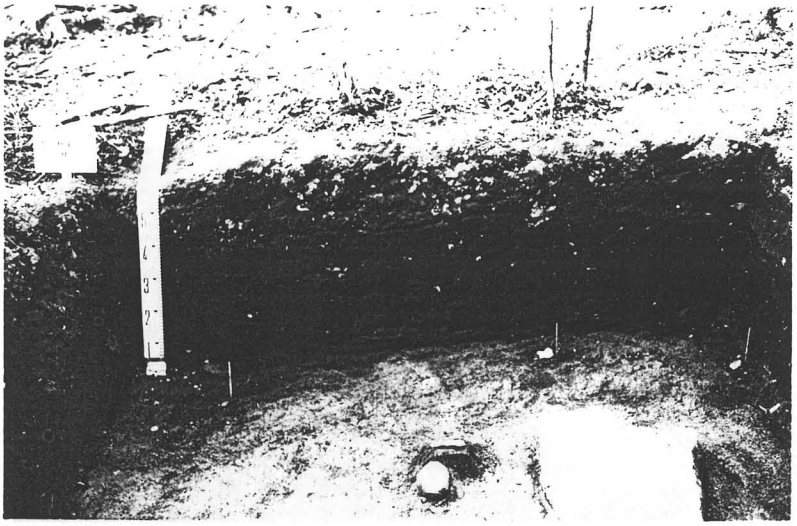
写真６



1．Ｈ６グリッド東壁断面

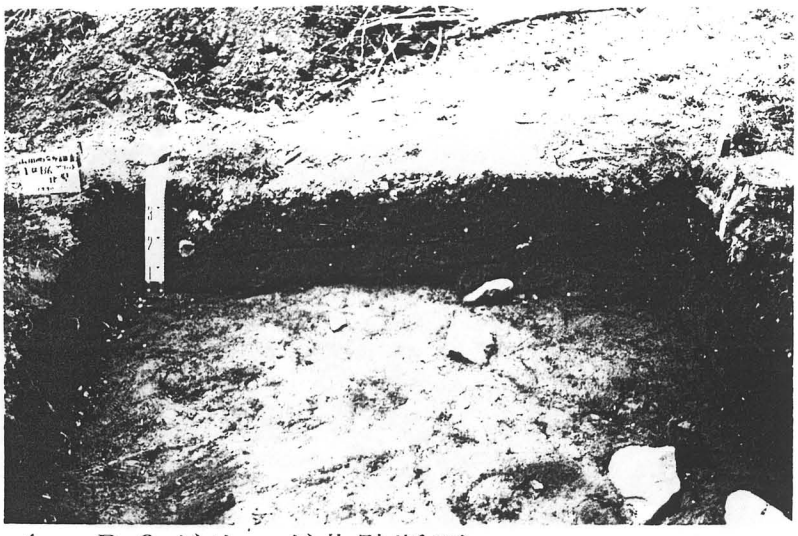


2．Ｂ２グリッド北壁断面

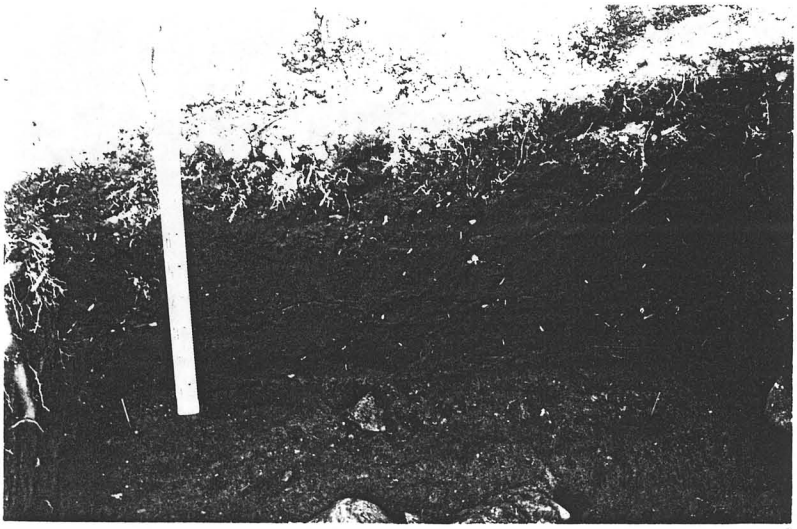


3．Ｂ４グリッド北壁断面

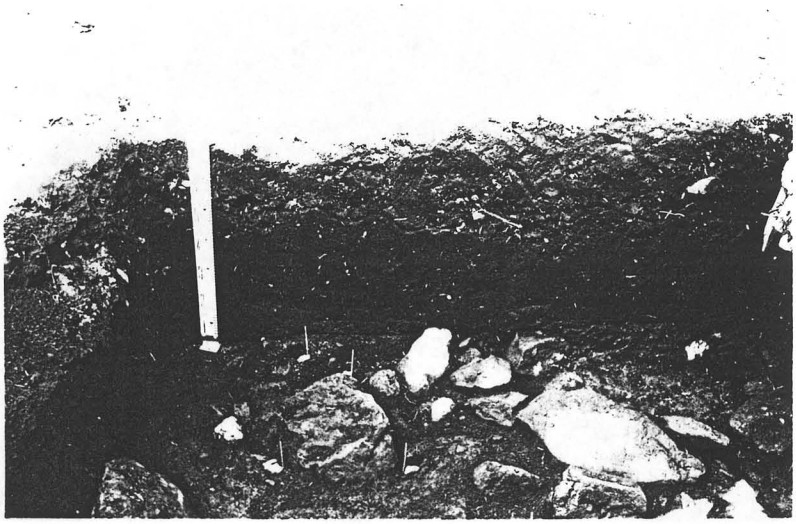
写真７



1．Ｂ６グリッド北壁断面

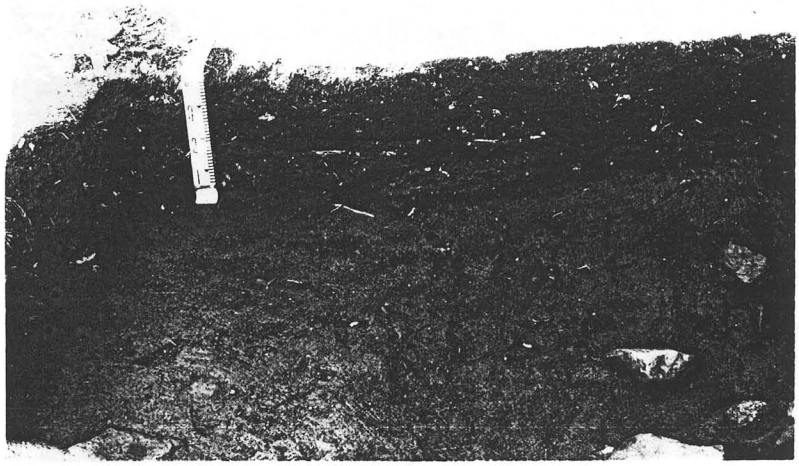


2．Ｄ２グリッド北壁断面

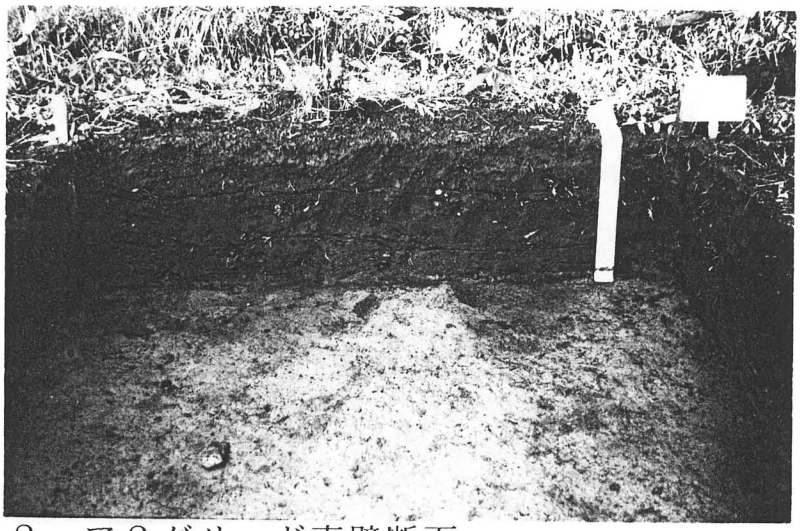


3．Ｄ４グリッド北壁断面

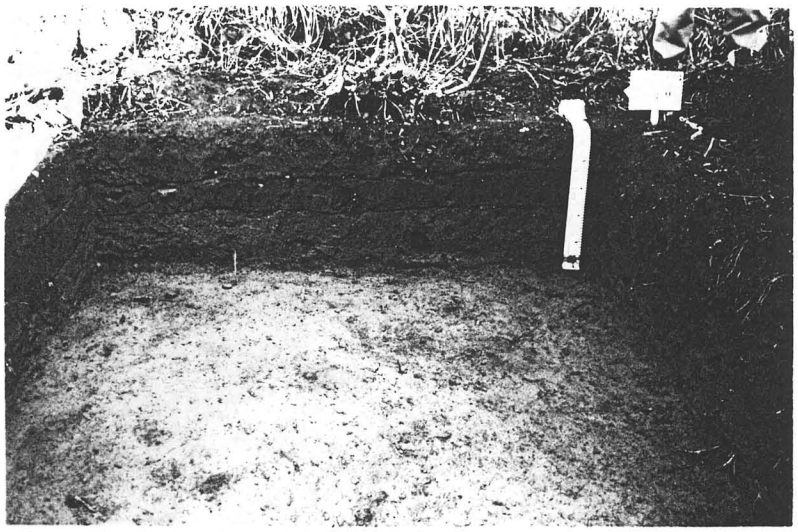
写真８



1．Ｄ６グリッド北壁断面

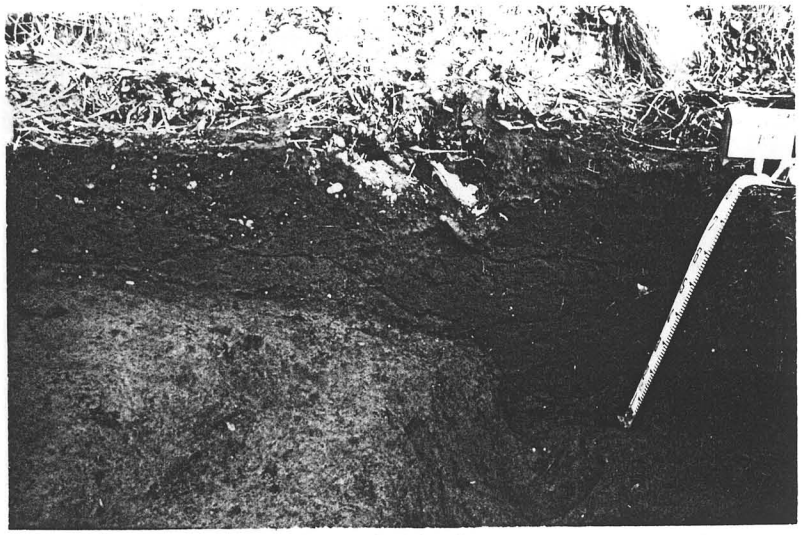


2．ア２グリッド東壁断面

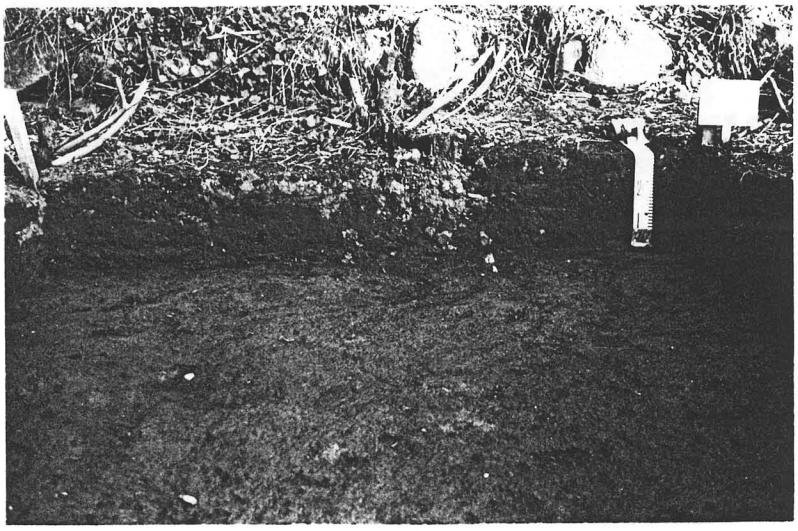


3．ウ２グリッド東壁断面

写真９



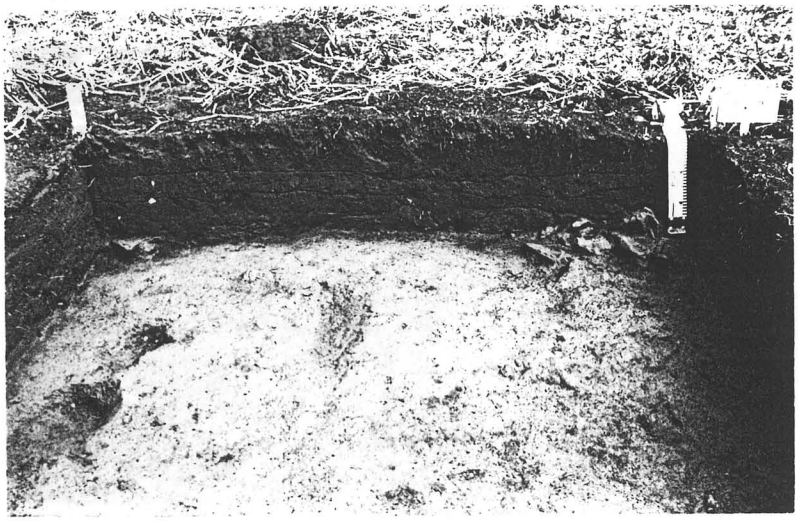
1．オ２グリッド東壁断面



2．キ２グリッド東壁断面

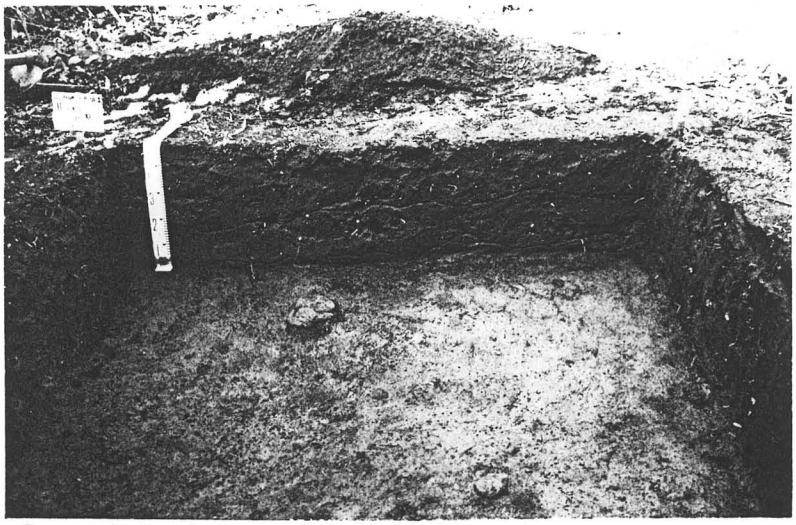
3．イ３グリッド東壁断面

写真10



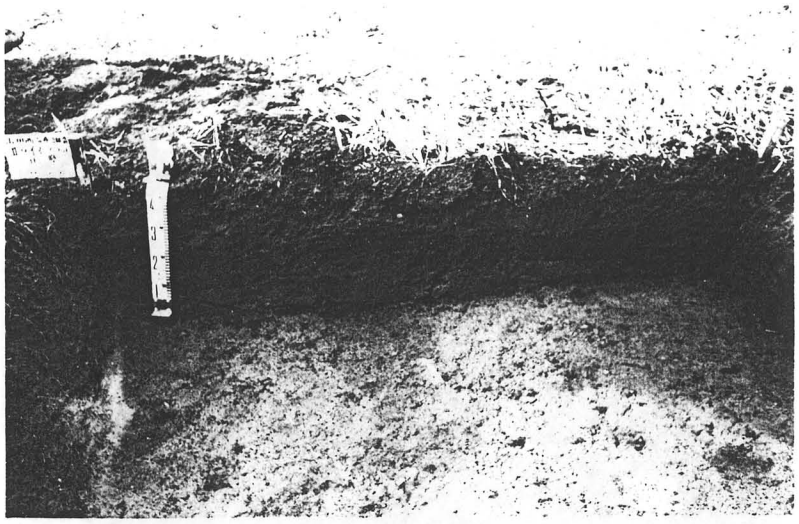
1．エ３グリッド東壁断面

2．カ３グリッド東壁断面

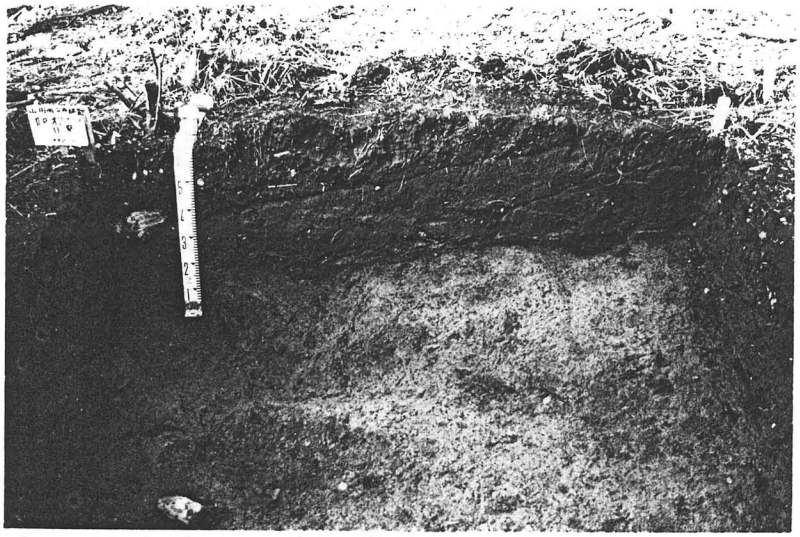


3．イ１グリッド北壁断面

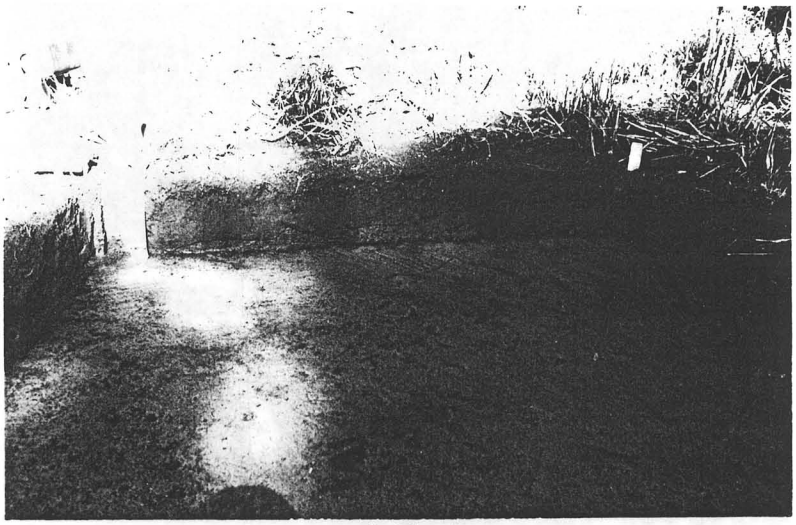
写真11



1．イ３グリッド北壁断面

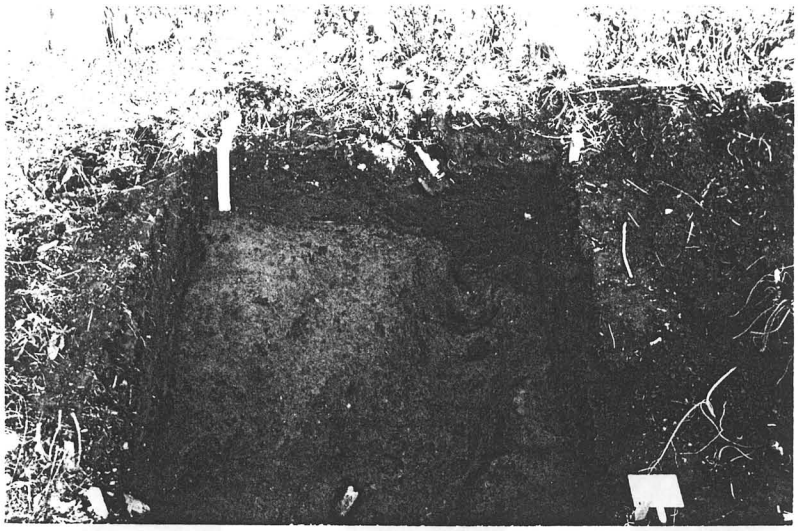


2．オ２グリッド北壁断面

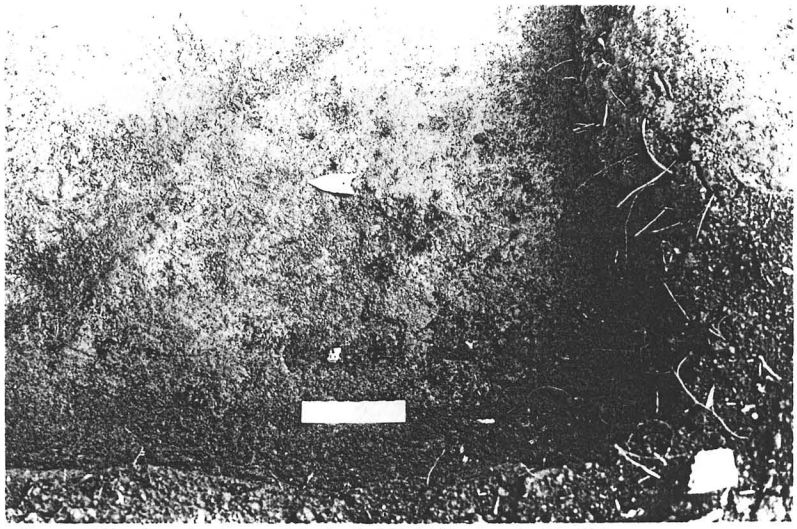


3．オ４グリッド北壁断面

写真12



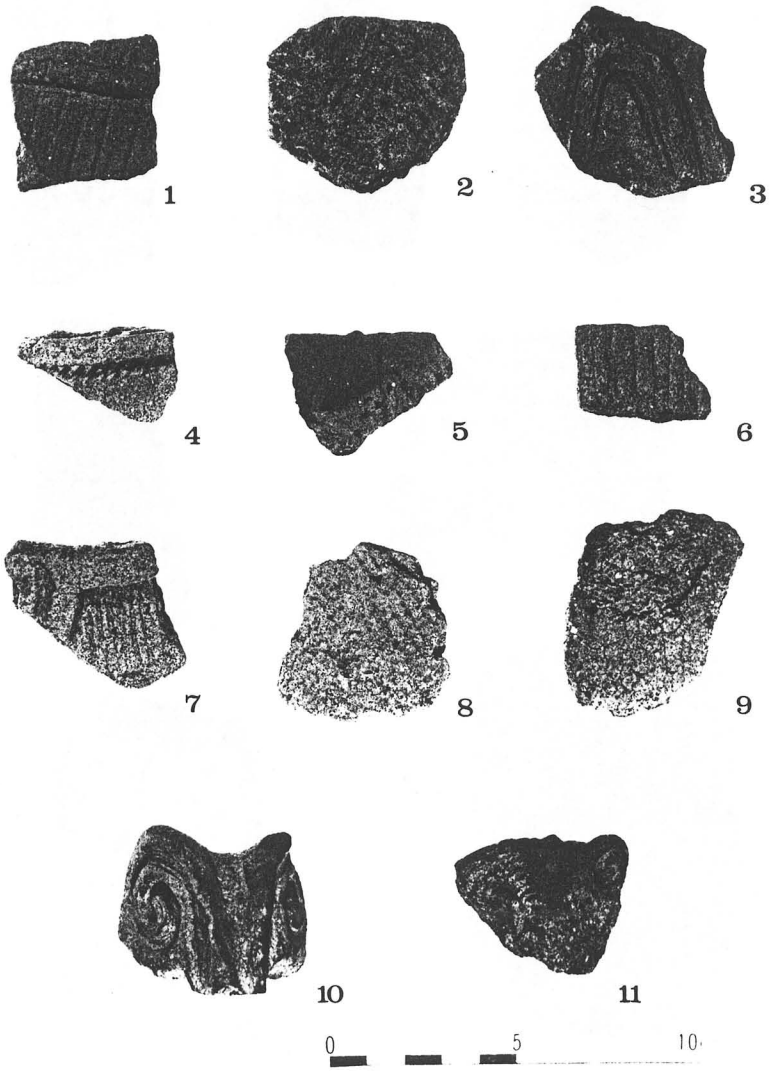
1．オ２グリッド流路検出状況



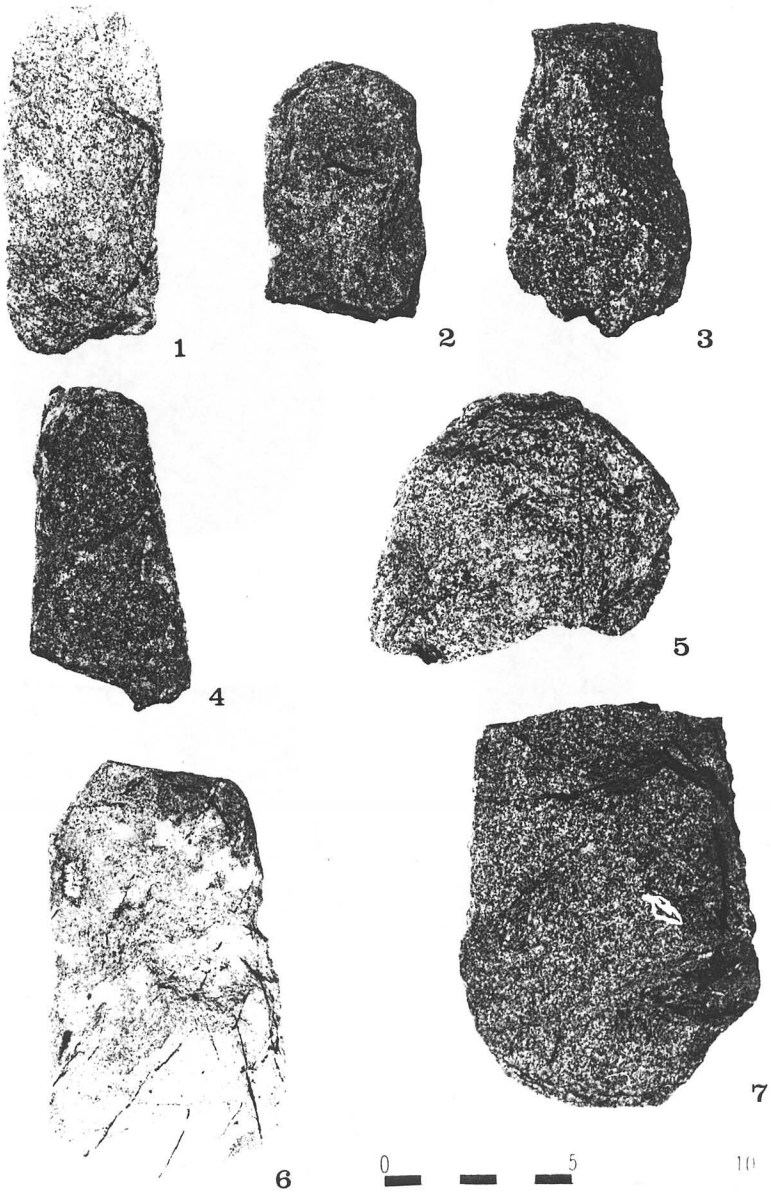
2．Ｈ４グリッド磨製石鏃出土状況

3．第Ⅱ調査区調査風景

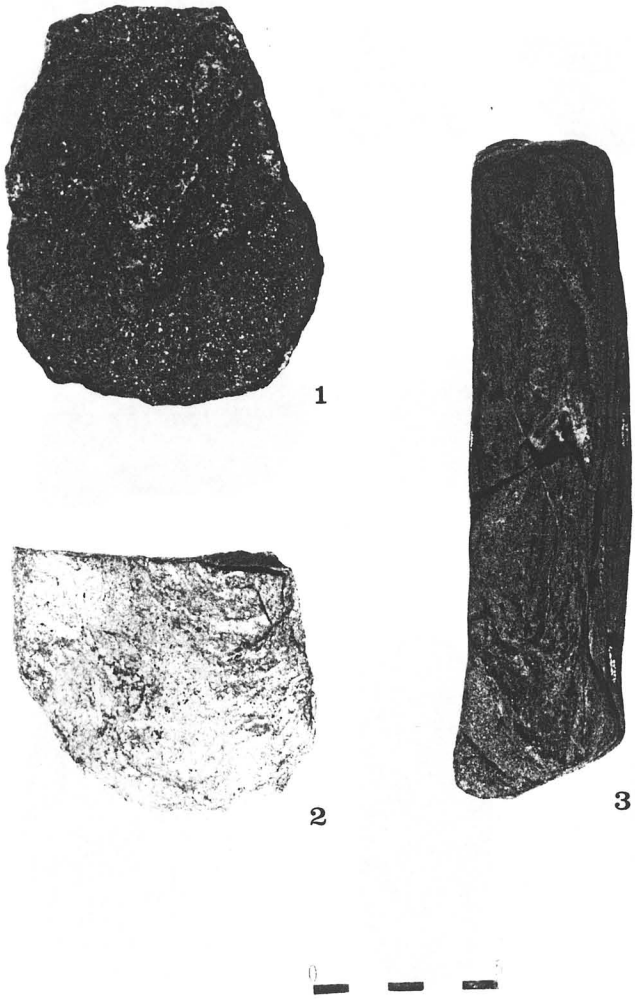
写真13



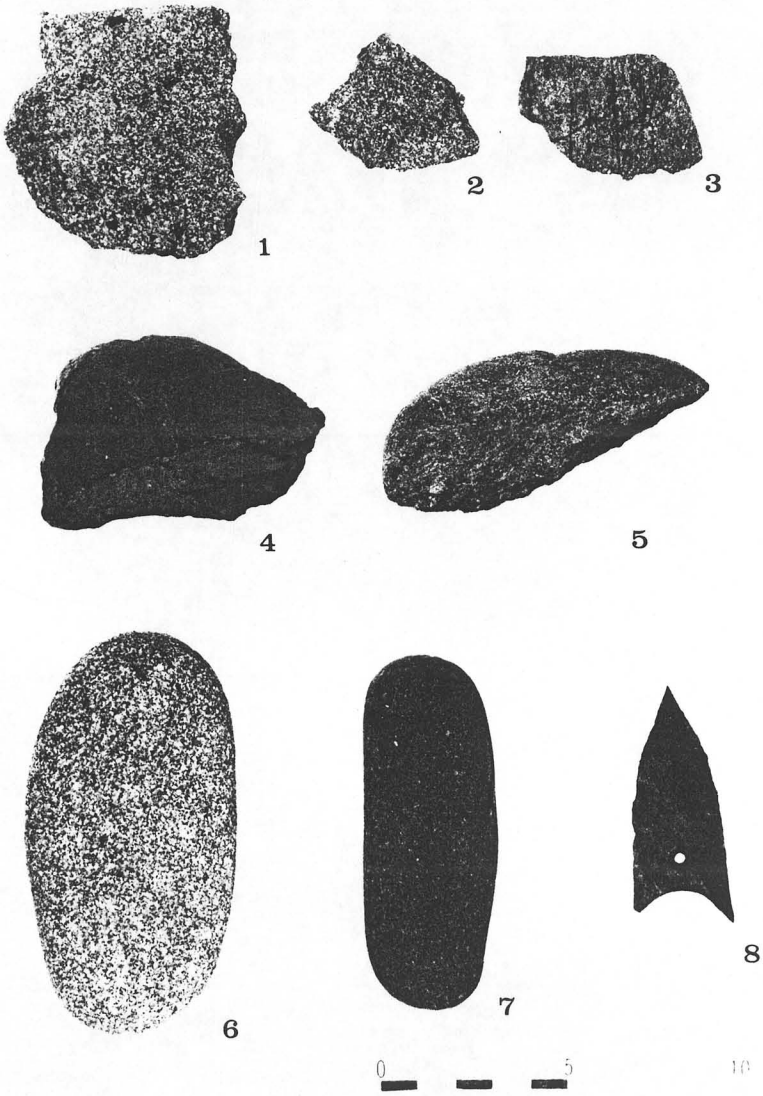
グリッド出土土器



グリッド出土石器　1



グリッド出土石器　2



グリッド出土石器　3

写真17